

川柳の雑記

麻生路郎☆主宰



Hojiro

六月号

No. 409

Pensoj flugas trans la land-limon
THE SENRYU ZASSHI

6月末日

不朽洞句帖

麻生路郎



パントマイム くもの巣払う所作もする

映画の情事と区別のつかぬ暮らしもし

自家用車 捨ててあるよな住居なり

終電の女を待ってやる根気

豆秋を悼む(二句)

死を知って楽しく遺書を書いたらし

豆秋が隅に来てそな悼む会

山を恋い イゴイズムとは気づかない

川柳雑誌 六月号 目次

題字……麻生路郎・表紙……野尻弘

不朽洞句帖

麻生路郎……(3)

名句と難句

麻生路郎……(4)

続・川柳料理暦

水谷竹荘……(26)

雨……

中島生々庵……(28)

二つの句意について

河村日満……(20)

末摘花について

山路閑古……(12)

断食で闘った糖尿病

吉田圭井堂……(34)

句評リレー

阿茶・夢考……(25)

★現代柳人録

川柳書架……(29)

川柳における大阪弁

北川春巢……(30)

★現代柳人録

川柳書架……(29)

豆秋の事ども

麻生路郎……(14)

豆秋さんを悼む(句)

麻生路郎……(15)

特集 ああ豆秋さん

生々庵・白柳・緑雨・没食子・栗文蝶・梅里・小松園・文秋・三夫……(16)

川柳とアメリカ

白砂旋風……(41)

大日お竹

富士野鞍馬……(33)

大日お竹

酒井ひか平……(27)

絵と川柳で表現する歴史

戸田古方……(34)

★「駄目」について

靖郎……(23)

★ある講演会で

綺史朗……(41)

川柳塔

麻生路郎選……(6)

同舟近詠

諸家……(11)

近作柳樽

麻生路郎選……(20)

金泥集

北川春巢選……(41)

各地柳壇

麻生路郎選……(42)

柳界展望

★不朽洞会から……(46)

一路集

丸尾潮花選……(36)

「年季」

津田麦太楼選……(37)

「ハナドル」

魚住満潮選……(46)

★柳樽室

▼ベンの散歩……(46)



川柳 名句と難句

麻生路郎

「きょうは、お早いんですね」
と、美しいのが寄ってくる。

「酌さしていただきますわ」

と、ちろりをとりあげられる。そのくせ、そろそろ客がこみ出すと、あの客、いつまで腰をすえているんだろう。いけすかないと云う顔で、こちらの方へは寄りつこうともしないそう。サービスには限界点がある筈だ。

〔一六九〕

茶詣で

ハンドバッグおき場に隣りの墓を借り
(どんたく)

葉参という殊勝な心がけはいいが、お隣りの墓をハンドバッグのおき場と心得るようではザッパリッヤでござりますると云いたい。

電車で知人や親戚には席を譲り合うくせに、他人には争って席を奪い合うのに通じる社会道徳の欠じよに外ならないのである。皮肉な句だ。

〔一七〇〕

年寄りの耳をくすぐるアリガタヤ

(一傘)

〔一六六〕

大仏の鐘杉を抜け杉を抜け

(五葉)

奈良の街の静けさを破って余韻翳翳と鳴りわたった大仏の鐘は旅人の魂をゆすぶらずにはおかなかった。そしてこの句が生まれた。「杉を抜け杉を抜け」と単的に擬人法で情趣を出したところ、作者の凡手でないことがうなずかれよう。

作者浅井五葉(林之助)は明治十五年、大阪上本町に生まれ、昭和七年七月六日に没した。職業は銀行員。句は大正元年頃の作。

次に大仏の鐘のことを少しく述べておこう。

奈良東大寺の巨鐘は天平勝宝四年(西暦

七五二)閏三月七日に鋳造完成、四月八日

に天皇の行幸があつて鐘樓に懸けられ、翌九日に、仏法東流以後の盛儀といわれた大

仏開眼供養会にはじめて鳴らされたもの。

昭和八年世界的文豪のバーナード・ショウが世界見物の途上日本に立ち寄られた際、

この鐘の音を聞いて激賞されたことがあったが、惜しいことには、四、五年前に竜頭

のヒビ割れが発見され、大事をとって一般には鳴らせず、僅かに初夜の時報(毎日

午後八時)にだけ鳴らしているそうだ。

〔一六七〕

ガム噛んでへっちゃらできく破談

(初甫)

こで独酌である。

ウツ寒いものだ。

飲屋のガラ空きと云うものは、お互いに

(高志)

がら空きのうちだけ飲屋酌いでくれ

〔一六八〕

歌手、守屋浩のヒット曲「有難や節」は

単調なメロディで人を喰った歌詞だ。

次にその一節を披瀝すると、

有難や有難や 有難や有難や

金がなければ くよくよします

女に振られりや 泣きます

腹がへつたら おまんまたべて

壽命尽きれば あの世行き

有難や有難や 有難や有難や

というのであって、音痴でも唄えるという

のが特色か。この句の作者はこの「有難や

節の歌ごえが、老人の耳をくすぐると皮肉

ったのである。名句だとは云えぬまでも軽

い穿ち味はあると思う。そこで座五の「ア

リガタヤ」が、有難や節の流行らなくなる

とともに、意味が不明瞭になると思われる

ので一応とりあげてみた。

「一七一」

よろめいて来たとは知らずつけまほ

か (圭井堂)

男は知に生き、女は情に生きると云われ

ている。

佐藤弘人博士の「はだか随筆」を読む

と、男がよろめくのも、もつともやもつと

もやと男ならうなずくに違いない。

「つけまほか」

は女の情である。ましてよろめいて来たとは知る筈もない。マンネリズムの妻の愛情

に、いささかくすぐったいという風情で、

「じゃア、一本つけてくれ」というところ

か。下五「つけまほか」の大阪弁は情味た

つぷりである。

「一二二」

慰さめる近所があつて続く嫁

(堰子)

「あんたのような、おとなしいお嫁さん

て、そうザラにいるもんじゃないわ。」

「そうでもないわ。」

「それに、あのおうちには、もったいない

ぐらい羨しいお嫁さんだものね」

「アア、そんなことないわ。」

「辛抱しなさいよ。今にあの姑さんが亡く

なれば、あの財産があんたの自由になるん

じゃないの、ねえ、ねえ」

「わたし、別に財産をあてにはしていない

の」

とは云うものの、近所の人の云う親切な言

業にも真理はあると思うと、

「辛抱、辛抱」

と、腹の虫をおさえてる嫁に月日が流れ

る。世の多くの嫁の現状がこれだとは云え

ないまでも、それに近いのが現実である

「一二三」

脛かじり難波の宮とか堀ってます

(堰子)

親の脛かじりのくせに、金にもならぬ史

蹟に没頭し、たしかに昔難波の宮はここら

にあったのに違いないと掘り返している

に。不肖の子を詠んで、時代錯誤とも思える親

と子の対照をねらったもの。

難波の宮と云うのは、①は五世紀の頃、

仁徳天皇の難波高津宮で摂津国東成郡大坂

にあったと伝えられ、②は六五一―五四、

孝徳天皇の難波長柄豊碓宮で摂津国西成郡

本莊村だと云われている。

「一二四」

十七才大人二三歩退ぞ

かし (喜由)

社会党の委員長、浅沼稻

次郎を刺した山口二矢が、

まだ思想のかたまりな十七

才だった。この事件以来、

十七才の事件があいついで

惹起したので教育の立場か

らも社会的にも問題となっ

た。人々の脛裡に十七才の少年や少女にはッ

ッカリ対手になれないという印象を与えた

ことは、「大人二三歩退ぞかし」の中七、

下五ので表現はうごかないであらう。ギョ

ッとした大人の態度をズバリと詠んで余す

ところがない。

「一二五」

ズロースをおどけてみせる老妓なり

(麦太楼)

「雨ショボを踊りまへよか」

と老妓はおどけて裾をまくったが、それは

あどけない舞子のそれではなくて、真ッ白

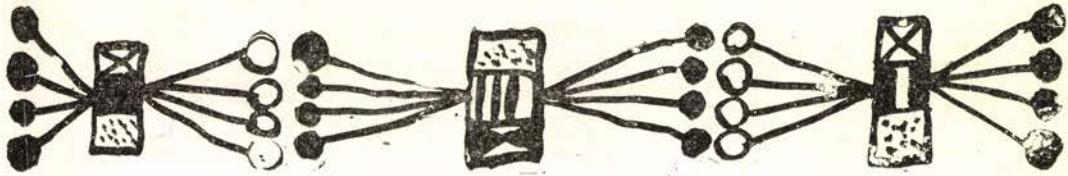
な色気のないズロースだったというのであ

らう。もう芸で売れない老妓の悲哀をアケ

スケに見せられたのである。



ビールは
アサヒ



豊中市 戸田 古方

求道者であるかしらんが酒がすき
モーニング不思議に似合う祇園下
京の春鳩まで京の春らしく

大阪市 市場 没食子

親も子も春の朝寝で遅刻をし
スト決行余波の被害へ煩かむり
建てつまり灰の捨て場にさえ困り
ノーマット時代に禿げて来た悲哀
戦前の地球儀父は大事がり

長男 転職

振り出しに戻り乳鉢液量器

大阪市 土井 文蝶

金貯めなあかんあかんと今日も飲み
花を見に来たそれなのに救急車
落ちて居る女の恐ろしい午前二時

西宮市 若本 多久志

旅なればがまの油に聞きほれる

心にもない祝電を打たしとき
人智無限只今地球をひと廻り
をやかてをやかてと女艶めかし

大阪市 正本 水客

ライターも早春という音を持ち
下積みの眼に執念というものを見る
娘の縁談ことわる頭下げておく
畳屋のひじを見ていて小半日

大阪市 西 いわを

坊さんに嫁してもハイヒール捨てず

感傷は十秒詩人型でなく

退社して会社の味が判りかけ

岡山市 武部 香林

解くすべなき明暗のズレおもう

水嵩が増して大地も春になり

大阪市 北川 春巢

予備校は自分できめた頼もしさ

浪人の髪がそろそろのびかかり

隠しマイクあるかも知れぬしゃべりよう

中学卒業三十周年の会

自己紹介渾名を云えば思い出し

ホノルル市 築山 快夢起

我儘も小出しに行こう養子の身

孫自慢またかと誰も聞いとらず

夢を追う若さもあつて古稀迎え

ホノルル市 白砂 旋風

アイクさん失業五百万で逃げ

体当り金持ち息子をアナタにし

寺の鐘ゴーンにゴクリビール飲み

十二才男を知って夢が逃げ

ホノルル市 羽佐間 柳葉

骨董屋時代と共に生きた口

親と子の夢現実で喰い違い

堺市 吉田 圭井堂

見晴らしは皆有料に押えられ

役柄は弥次馬ですとエキストラ

慎切るから嫌よと娘ついて来ず

断るか泊めるか靴から見上げられ

防府市 長野 井蛙

滞貨量労組グラフにして誇り

笑うても泣いても女は損をせず

首のないオルグが陣頭指揮をとり

花の座へ軽い財布が落ち付けず

岡山市 直原 七面山

もう少し夫野蠻であつて欲し

お隣りの見栄は附属に子が通い

申しわけにそだけ隠して水着ショー

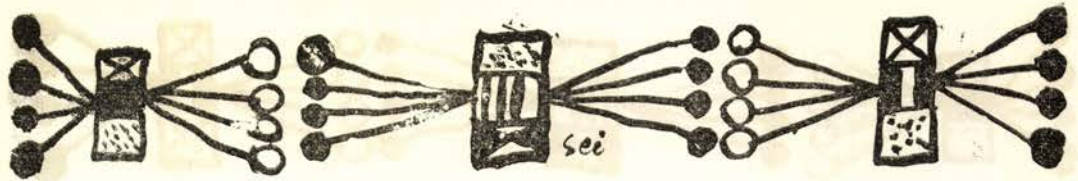
大阪市 西森 花村

政治欄色里に似て嘘と嘘

居眠りはせなんだ歳費値上案

電鉄の手先となつて桜咲き

宇宙人国境なんか見えなんだ



桜とは此の世に散りに来たような
交通マヒ向いは遠くなりけり

鳥取市 河村 日満

ライバルの転動夫婦して送り

こどもにも夫婦の寝間を犯させず

容姿端麗女房を二三寸凌ぎ

豊中市 足立 春雄

切符さえ案に買えぬに又値上げ

自家用で肝を冷して送られる

倉敷市 木村 千容

色素(三句)

色素だらけの古女房もすてがたし

しみひとつひとつ貫禄そなわりて

色素だらけ互にめがね抜きにする

年順に死ねと年下えげつない

加賀市 野村 味平

いつわらぬ妻の俳句も素直なり

お針してもらう妻の健気なり

大阪市 木村 水洞

改名で呼ばれて照れている返事

改名をしてまで怨を捨て切れず

高槻市 福田 丁路

髪の毛を茶色に染めて親泣かせ

先生と呼ばれ陣笠目を細め

大阪府 真鍋 一瓢

父のクラシックは追分博多節

月給へ嫁く見合なり恙なく

レジャーレジャーとうちの母ちゃんまでアジリ

逆うなありや農薬のよな男

春うららこんな日和に袖カバー

大阪市 後藤 梅志

何くそという気で自ドゥ車を避ける

テープにもとられ稽古もらくでなし

米子市 小西 雄々

職場見学うちの父ちゃん汚れてる

即席のラーメンに似るすてた恋

焼香へ二号の方が泣きくずれ

大阪市 山川 阿茶

ささやきへ大きな声で返事され

ぜいたくをしたさにベース踏みはずし

大阪市 金井 文秋

生き甲斐を会長二つ三つ兼ね

越境も見栄の一つに困地族

加賀市 那谷 光郎

ガニ股の哀れ和装で又出掛け

酌ぐまねを機嫌上戸に見つけられ

下関市 桜川 不水

バラの出来しばし恩師へ奉る

はしたない心読まれて冷やっとし

忘れんぼう同士笑ってお茶にする

酔いぎめの心をきぎむ置時計

岡山市 浜田 久米雄

モヤモヤを抱いて春霞を歩き

一級酒恩に着せられそうに飲み

親せきの死へ東海は花ざかり

遺児ほろり落花の下へたずんで

新聞を見ればどえらい人も死に

大阪市 水谷 竹葦

インスタント時代庖丁いりません

鳥取市 杉谷 湖山

今日も社長お出ましならぬ机拭く

遮断機の向うも急ぐ顔ばかり

ラッシュアワーどしんと娘に押し出され

奪れるだけ奪れと乳牛静かなり

京都市 大鶴 喜由

この友は利害にからむ友にして

この人に生活力ありと見て悪いぬ

花の散る宵は死にとうなってきた

浪花節をきくのが趣味でと鼻をかみ

奈良県 西辻 竹青

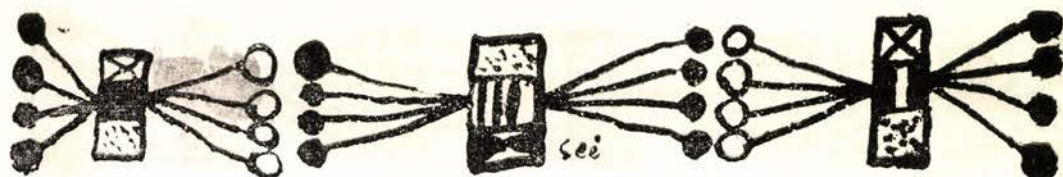
これ程の恥辱もたえるまでに老け

呉市 林野 魁光

花咲いていざりも書入れ時となり

事勿れ主義駐在の猫昼寝

今に見ろ月と戦争するならん



日展にて

大阪市 阿万 万的

ビル、ビル、ビル都会の土の老いた色
緑一色の中に生きてる滝の音

青葉青葉眼をつむつてもまだあおく

雨上りの長崎赤がよく目立ち

岡山県 福島 鉄 児

網棚へ春の土産を置き忘れ

婦唱夫随ただ花みて歩くばかりなり

岡山市 服部 十九 平

隆鼻術親しみにくい顔にする

T B になりたいなどと娘のセンチ

赤ちゃんが生れテレビはほつとかれ

尼崎市 長谷川 三 司

子の夢にロバのパン屋はもう来ない

まだ一人り子が帰らない茶碗むし

ニュース版きようの出人足の撮り

西宮市 若 林 草 右

投銭を猿に拾わせ煙草の火

殺人犯を酸素吸入までして生かし

招かざる客インスタントで追払い

インスタント料理に妻の座が揺らぎ

広島県 山 田 季 賛

値下りのテレビも我が家まだ買えず

質札はこれさと友が見せてくれ

同僚の株の話も聞いてやり

岡山県 田 村 藤 波

ラッシュアワー人が人なら吾れも吾れ

お通夜じゃあるまいさあ飲めさあ唄え

児島市 本 田 恵 二 朗

かしわ手に力をこめる子の入試

春闘の候おかわりもなく暮し

見合では気取ってたわと老妻め

京都市 松 川 杜 的

これしきの事ビーンと株値にもうひびき

靴音も春だ故郷の山近し

打てばひびく頭脳が出世の邪魔になり

鳥取市 森 本 法 泉 子

考課表組合もうなずくのが一人

花の下赤い鳥居はふりむかず

母を越し父にせまった娘の背丈

岡山市 津 田 麦 太 楼

小さいき抵抗編み物の目が一つ飛び

有りがたや一期一会の京の春

車車車人間が邪魔になり

コゲ茶のベレー童話作家も老いたり矣

もじり着た隠居二号に手をひかれ

吹田市 橋 本 幸 男

春うらら例会の寄り少なすぎ

うっかりとしていた友の四月馬鹿

堺市 高 崎 雄 声

お金を大切にしろと百円札に言われ

ホワイトが好き女で近寄れず

あれた手を尊しと見るも齢か

島根県 藤 井 明 朗

投げテーブル一夜の恋は切れてゆき

昇給の右へならえも下薄く

岡山県 永 松 東 岸

モニターのようなお客もいてはやり

春雷が病む身に心地よく響き

見舞品大方子等にくわれたり

子のホック妻は背延びをしてかける

倉敷市 野 田 素 身 郎

棟上に満開の枝じやまになり

寝顔だけ見れば手を焼く子にみえず

ひげ面もステキと見舞の娘に言われ

大阪市 木 村 十 悟

じい、ばあーと遊びたかろー浩の宮

目くばりをしてから這入るスードジョー

その罪の軽さに浮べぬ過失致死

大阪市 伊 達 塚 子

さて花見動物園ではついて来ず

土手はそよ風疎開の車曳いた道

大阪市 不 二 田 一 三 夫

自費のとき女は素うどん注文し

土俵ぎわグルグル回るわが暮らし

兵庫県 酒 井 ひ か 平

売店は泣くに泣かれぬ花の雨

貞女どころかへそくりを株ですり



奥さまが注文ですと冷蔵庫

宇部市 津 秋 六 花

遺言状書いた頃からいえ初め

人前で逢えば質屋の空々し

一粒を拾う農夫の手が太い

芦屋市 丸 川 初 甫

清貧へ人の心の奥を知る

老梅の枯れたふりして芽を出して

岡山県 池 田 古 心

恩給の釣りなり釣れても釣れんでも

薬代だけに働く気が仕出し

東京都 石 居 高 志

自転車で通り勤めをみくびられ

さりげなく酌いで妬いてる目をあげる

亡妻百カ日忌に

流感をおして手向ける香にむせ

大阪府 早 川 清 生

卒業式の市長代理は市電で来

上 京 (三句)

飛行機の窓から機関銃がほし

ただ立っていても江戸っ子浪花っ子

一文もやるかい東京弁の乞食

岡山市 武 部 若 菜

郭沫若氏詩神除幕式

友好の歌へときめく人も若葉も

貸莫菫を落胆させた花見客

堺市 辻 圭 水

豆スターあれあれおねしうしてはった

女湯へ傘を届ける俄雨

息子もう親の慌てる質問し

加賀市 中 松 恒 雄

スイッチを消して廻るのが親爺

どん底へおちて占いまだ信じ

大阪市 児 島 与 呂 志

体当りダンブで稼いで食うてチョン

気の弱き新聞一とつ断れず

車掌から世話焼き切符中継し

急停車車掌一人の怪我で済み

岡山県 野々口 美 舟

けちんぼが逝けばどの子も帰って来

一雨は桜の花を土手へ敷き

ハイと言う返事の嫁が氣にくわす

西宮市 小 浜 牧 人

花散って病人のころにかえり

絵はがきへ連れた女の名は書かず

遊ぶこと知らぬ社長をばやくなり

老巡査の憂うつ求人欄を読み

四〇妻強し他人をあてにせず

色街は春の宵なり鼓鳴る

岡山県 池上 知 恵 美

附添の空腹たこ焼買うてくる

冬眠へ春をささやく芝生の根

大阪市 橘 高 薫 風 子

煙草のけむりも窓から出て行けり春

手の早い唾の夫を見放さず

パチンコにさえ玄人があるのなり

下関市 中村 九 呂 平

自由画に母のない子が母を画き

メモ通り角を曲ってポストあり

曲りなりに済みましたとは謙遜な

奈良市 宮 口 笛 生

子供等に神々しくもない社

朝の露イチゴは甘い色になり

サロンパス妻もおんなじとこへ張り

大阪市 榊 本 露 児

長男と長女が祖母を取りあいし

名画展ガム噛みながらみる女

アルサロの隣寸持ったばかりに

鳥取県 田中 蛙 眠 子

二度三度風邪の鼻かむ女事務

ドドンパのひばりは祖母に嫌われる

化粧映えせぬ女なり節婦なり

勝基だと読んだ扇子の半開き

ご位牌へ「行ってきます」ランドセル

岡山市 林 葵 丘

春風へボートの漕げぬ事を悔い

嫁にやる話をきめた遍路宿

ホームバーベッドムードの準備もし

神戸市 仲 どん たく

又一枚未来の長島ガラス破り

仲人が自分の場合を例にとり



男ぎらいの女史にもあつた泣きどころ

平田市 久家代仕男

おっちょこちょいの顔に似合わぬ律義ものを
子と思う母に安らむ日とてなく

出雲市 原 独仙

放送局に勤めて擬音係なり

ネクタイを直して上げてキスをされ

花よりもダンゴの客がここかしこ

岡山市 江国 幽谷

正座してからおもむろに擦る祝

朝鮮語独立国として話し

二十年前の着物をまだしまひ

岡山市 光 好陽子

鉄びんのつやにたしなみあるを知り

拝借の洋書に積んだわたほこり

電化したレジャー出歩くくせがつき

西宮市 野 呂 鶴汀

先輩が酔うて勘定払わされ

西宮市 樋口 舟遊

岡山後楽園

陰陽石藩主はくだけたらしい人

大原女の桜へくれて売りたいそぎ

新潟県 高野 むじな

草月展なる程捨てるものはない

東大を落ちたと経歴にも入れる

大阪市 魚住 満潮

続西成界わい

女下駄オカマが煙草買いに来る

脱獄囚西と東に別れたり

男同士の約束今夜は月も無し

愛媛県 村上 旭童

今置いたものを探しているも春

野良は雨庭の桜を見なおさん

春や春米年こそはどこかいこ

チビチビと名所で使うあほらしさ

飲む程にますますダンブカーに似て

倉吉市 大前 鳴恍

春や春待ち呆けばかりくわされる

せせらぎの泡さえ春の色をもち

アクセサリーのように男を連れ歩るき

教壇のオールドミスの眼が光り

鳥取市 北村 三步

反対に反対をすると意見らし

長女一年生

家の子が一番賢しこそうに見え

貸上げスト

鉢巻も固くカメラの前にたち

残業の父を迎える月明り

スカートに替えて春待つ娘のしぐさ

アルバイトしてます恋もして居ます

淋しさに恋の話も聞いてやり

神戸市 傍島 静馬

ごりやくにスリもあやかる大遠忌

楚々として美人素早く掛けちまい

大食堂こども食いたいのばかり

布施市 森下 愛論

金払う方を呑み屋は心得る

岡山市 宗高 矢寸志

花の山まだ日は高く酒が切れ

聞き耳を立てるとマダム目が生きる

病室のインテリ力なく笑い

親の目に担任教師が頼りなく

大阪市 河井 庸佑

転動を過分の言葉で送り出し

主任主任といやな役回しとき

かつぶくがあつて小心とは見えす

大阪府 谷 沢 好祐

趣味は読書だけど難太や樹一郎

六人の頭を妻にした因果

泉大津市 高津 徹也

ハンドルにそろそろ紀州灘の風

愛媛県 横 紫光

商敵へ花輪は甘く見た証拠

身内から立てば党派は云うとれず

肌荒れを八百屋はCのせいにする

青森市 工藤 甲吉

春愁は税務署からの手紙が米

ソ連人間衛星に成功

人間衛星物価が下がるワケでなし



玉野市 伊原明林

押売りを返した口で子を叱り
貧乏を押売りにまで知られおり
眼くばせで一升あいた事を知り

酔うても酒の残りは知っており
三等社員そろばん三べんともちがい

松江市 小林孤呂二

包装紙なか味しらない辞儀をする

バスが通り里帰り多くなる

松江市 舟木与根一

夕刊を掏摸が一緒に覗きこみ

マーケットバラックのほうがよく売れる

初の宇宙船成功

祝電を打つアメリカの手がふるえ

豊中市 林夢虹

小さな誤解川辺で風の音を聴く

人生のある日ナイフの欲しい日の

月が淋しい時私は燃えている

ジョーとより知らぬ友あり大都会

尼崎市 吉本菁風

ガレージも無いのに車買っている

L・Pを持って友達やって来る

西宮市 山本一傘

母危篤医者になりたいと思う

ボロクソに云える子飼いの部下が居り

殺し屋が殺される日のモダンジャズ

大阪市 今西生薑

ぶらんこが通天閣を蹴っている

定年が責任感をホッとさせ

風流夢譚読んでいないがテロは嫌

京都市 室井八九寸

警備まで他力本願大遠忌

書留へ探し出した判詰ってる

奈良市 内海敬太

不朽洞に路郎師を訪れる

師と撮す池の桜は八分咲き

須磨に牧人さんを見舞う

あそこにもここにも舟が海は青

あの先生も女に眼がないらしいとき

岡山県 横山一声

桜より着物の柄に見とれて居

やりくりが付かない内に花が散り

家庭教師おいてる方がすべて来

小松市 関戸宗太郎

診断書へ書く病状を不足がり

松葉づえついても天下の祐次郎

合格の通知階段踏みはずし

石川県 高山涼髪

合格へ金を使うたとは言わず

ちゃんちゃんこ庶民の子にはよく似合い

すこしぐらいがめつさほしいうちのパパ

お酒臭いわと身をかわしながら酌ぎ

かんたんに葬式してやと言うて逝き

美祿市 安平次弘道

葬儀屋で値切って顔を見直され

容疑者ときまり敬称はずす記事

しくじってしばし都会の灯をのがれ

愛媛県 渡辺晩童

ひろいやの眼光剣道二段級

正五位のうち死あたり観光地

なで肩の案山子に未亡人したて

学割でオーシャンくさい説をなし

同舟近詠

須坂市 高峰柳児

新入社簿のあり場も教えられ

貯める欲だけで人生悔もせず

下積で皆勤だけが認められ

左遷ながら桜が早く咲く僻地

和歌山市 秋月宏方

出前注文舌打ちされたとは知らず

話すほどに按摩も株の通と知り

竹槍の記事も出て来た古日記

新居浜市 月原宵明

背番号3ばかりの草野球

ジャムパンに似た髪をして夜の蝶

華やかに服装学院始業式

何処でどう取ったか華道の青き麦

人生をとほけ通して使用人

パパバイバイおもちゃのような家を出る

末摘花について



山路閑古

古川柳の中で、誰にでも面白味のわかるのは、閨男や下女などの出て来る末番の句であろう。私が古川柳を研究するようになったのも、そもその動機がここにあり、今でも古川柳は末番の句が一番面白いと思っている。

末番の句というのは、末尾に置かれる下等の句という意味で、菓子でいえば駄菓子みたいなものである。何故そんな下等なものが好きなのかといわれても返事に困るが、私の下等の品性が然らしめたものである。

末番の句を集めた書物に「誹風末摘花」というのがある。末番の句ばかり摘み集めたという意味であるが、実に二千四百句という膨しい数の末番句を採録している。初篇から四篇まで四冊刊行されているが、このような楽しむべき本は、世界にもちょっと類がないと思う。私は四十年間の書を読み続け、そして今日も尚飽きることなく読み耽っている。

私は日本人によって作られた本では、第

「一面白い本が『源氏物語』で、第二がこの『末摘花』だと思っている。黄菊、白菊、その他の名はなくてもがなで、他の本はいらないという訳ではないが、繰り返し巻き返し読んでいるのは、この二書である。『源氏物語』は千年も昔のことが書いてあるので、文章も内容も古く、現代の小説を読むように、簡単には読めない。少なくとも大学課程以上の、国文学の素養を身に着けた上でないと読みこなせないであろう。

これに対して『末摘花』は、二百年程昔に作られた本で、文章も口語体が主で、内容も閨男や下女であるから、甚だわかり易い本のようなのだが、実はそうでない。これを完全に読みこなせる人は、それだけで文学博士の値打があると、永井荷風もいつている。その永井荷風でさえ完全には読めなかったのではないかと思われる。

私が四十年間、この書を反覆熟読して、尚且つ飽きるところを知らないのも、実はこの書があまりにも六カしいからである。一人の力ではなかなか読めないから、四五

人乃至七八人の同好者が寄って、研究しながら読むのである。明治末期から大正にかけて、日本の識者の間に、社会主義の研究というものが行なわれた。彼等も六カしい外国の書物を読むには、やはり同じような方法を用いたのだった。一方は国体の変革や、社会の改造を企図する秘密結社であり、一方は閨男や下女と取組む、好事家の集まりである。内容は天地毀壞の違ひであるが、それにも拘らず、たまたま読書の方法が似ていた為に、混線を来し、やがて『末摘花』も社会主義や共産主義の書と同じように、国禁の書となってしまうた。

大正の初めに三田村鳶魚や三木愛花などの先覚が、警察当局から注目されたのが、この書に加えられた取締りの最初であったようである。これらの先覚は『末摘花』の内容について、当局とも十分に話し合ったように思われるが、大体が閨男や下女のこゝとばかり書いてある書物であるから、役人の目から見れば、風俗壊乱の書と見られなこともないのだった。結局は敷をついて蛇を出すようなことになり、当局に別の口実を与え、今度は風教に害があるという名目で、取締りを受けることになった。現代人には殆んど解説の出来ないような六カしい書物が、いかなる内容にもせよ、一般の風教に害がある筈もないのだが、今述べたような混線のいきさつがあった為に、自然にそのように取締りが転移したのである。

専門家でなければ読まないような古典の書が、風壊の危険があるとて、不当の取締りを受けるようになったのは、明治三十年代の初期からである。当時帝國文庫の「西

鶴全集」が繪玉に上ったのが最初だともいわれる。それも出版者が、際どい箇所を伏字にして発表するという、良識的な手段を用いたので、却つてない子に知慮をつける結果になったのであった。それ以来六カしい古典の書にも、取締りが加わるようになり、実にいわれないことであるけれども、これも一種の社会現象で、ナチの禁書や始皇のそれと同じように、凡慮の思議すべからざることである。

『末摘花』も今日でこそ古典の文学書として、専門家以外には解説されないものとなっているが、二百年前新刊された当時には、誰にも読めた面白本であったことはいうまでもない。あまりに面白本であった為に、やはり当時の官憲の取締りを受け、店頭販売は許されなかったようである。寛政改革、天保改革の二度の取締りを受け、『末摘花』は完全に地下に潜るに至った。

こういった前歴がある為に、古典のさびがついて後も、『末摘花』はなかなか日の目が見られず、おまけに禁本という烙印まで押されたので、いよいよ読書界から遠ざかる他はなかった。

終戦後、不当の弾圧を受けていたものは、すべて解放された。社会主義も共産党も皆浮び上った。唯『末摘花』だけが過去業因が深い為か、なかなか解禁にならず、それを無視して公刊した出版者が、たまたま検察当局によって摘発された。その書物は原本通り「誹風末摘花」(はいふうすえつむはな)という題名を据えてあった。しかるに検察当局では、これをヒップミデキカと読んでいた。すでにこの書が古

典になった証拠で、現代人の常識では、書物の題名すら読めないものであった。そういうカビ臭い書物まで、今更取締る必要があるかということが、当局内部でも漸く痛感されるに至ったようである。

この事件はついに正式裁判に掛けられることになったが、内部の動きが右のようであったから、結果はおのずから明瞭であった。被告は無罪を宣告され、「末摘花」は公開図書として、自由に出版なし得ることになった。

どうせ勝訴になることは、最初から判っていたような裁判ではあるが、法廷は型通り厳正な審理を行なった。その為に全国有識者の中から鑑定人を選び、その鑑定を参考として結審をするという方針がとられた。

当時三田村鳶魚や三木愛花のような先覚者はすでに故人であった。阪井久良伎、大曲駒村、飯島花月も故人に属し、宮武外骨、三田平凡寺などは当時まだ健在であったが、老衰で出延も意のままにならなかつた。その他にも有識者は何人か選ばれたようだが、いずれも出延を断つたというところである。最後に人選に上つたのは、松江在住の木木真弓と、その門下乃至は友人の關係にあった山沢英雄と私であった。木木は遠隔地でもあり、病体でもあった為に鑑定を辞退し、結局山沢と私がこれを担当した。

私は山沢と相談の上、鑑定の分担をきめた。山沢は記紀、万葉から江戸文学に至るまで、軟文学と目されるものを調べあげ、これらが古典として出版を許されている実情を具申した。私は専ら「末摘花」につき、検事が公訴事実として列挙している個

所を釈明することを受持った。

私は多年愛読している書物を、この際何とかして救いたいと思った。これを公開図書として、広く多くの人に読んで貰いたいと思った。私自身は前にも記したように、この書を「源氏物語」と同じレベルに置いて愛読し、大いに益を受けているような訳であるから、おのれの欲するところ、これを人にも施そうとて、出来るだけ手を尽した。幸いにして意外に簡単に事件が解決したのは、すでに熟柿が落ちるばかりになっていたからであらう。従つて私たちの労績というものは、実は何程のことでもなかったのである。

しかし私個人としては、社会にこのような善事を施したことはかつてないのである。人のいやがる役を引き受けて、難に当つたということは、自分でも快心事だと思つている。それが運よく成功し、二百年前白河楽翁によつて官封せられたものを法廷で論戦して、解放の運びに持ち来しということとは、何といつても痛快だと、心ひそかに思っている次第である。

私は別に學者でも何でも無い。唯一介の読書子に過ぎないのであるが、この事件があつて以来、一躍して末摘花學者のように喧伝されるに至つた。全国諸所から講演や執筆を頼まれ、著書も二三種出している。講演の後では先生の著述を拝見したいと申し出る熱心家もある。その都度、末摘花關係の旧著を送つてやるのであるが、記述が少し六カしい。もう少し判り易く、素人にも読めるように、面白く書いて下さらないでしようかといわれる。

「末摘花」は大体が昔から風俗の禁書となつていたものである。それが古典となつて

カビが生え、一般に解説が出来なくなつたという理由で解禁になつた。そのような書物を判り易く書けば、再び禁書に戻つてしまふことは、当然である。だからあまり平易には書けない訳だが、前述の通り、私は裁判官と被告の間に立つて、双方に納得の行くような解説文を書いている。しかもこの鑑定書は公開文であるから、当時の新聞にも一部原文のままで掲載された。この解説があつて、初めて「末摘花」が解禁になつたような形でもあるのだ。この範圍のことなら、鑑定人である私としてはいつでも書くことが出来るし、何処からも小言は来ないものと思う。早い話が私にはそうした実績が認められているのだ。それは威張る訳でも何でもなく、運命がそういう事情に、私を導いたのである。

そこで私は、「末摘花」の諸句を誰にも判るように、そして不体裁に亘らぬよう、面白く、気軽に読めるようにアレンジした随筆風の一著を公刊することにした。実は本書がそれであるが、序文とも何ともつかず、随筆に書き起したのも、その目的である。

挿画や写真も入れようと思つたが、「末摘花」の挿画では、春画の部分品みたいなものになり易いから、これはよしな方がよいという注意も受けた。原稿は最早半分程出来上つているから、これを印刷に廻わし、印刷が進行している間に、ゆっくりと後半の原稿を書く。印刷は夏季に印刷所の暇の折にやつて貰い、しかも成るべく時間の掛かることを希望する。従来著書が印刷に掛ると、あつという間に出来上つてしまふ、碌な校正もしない中に本になつて、店頭に出されるのであつた。全くの粗製濫造

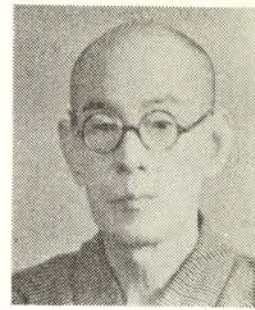
品であるから、売れないのもやむを得なかつた。今度の本は、店頭で売ることを目的としないで、愛読家には実費だけを預いて、安く傾けることにした。無論著者は印税などは取らず、それだけの費用を本に掛けて、出来るだけ立派なものにしたいと思ふ。

この出版を引受けたのは、書痴往来社の峯村幸造君である。君がやりましようといつて引き受けて呉れたから、私もその氣になつたのであるが、その後何の話もしていない。多分君は心得ているのだらうと思ふ。

序文に相当するこの部分の原稿は、麻生路郎氏の主宰する「川柳雑誌」に載せて貰うことにした。私はこの雑誌の洞友ということになつて居り、その義理で年々何回か原稿を差出さなければならぬであらう。丁度こういう文章が出来た。まずい文章だが、これでも書き下しであるから、いきのいいところで雑誌に掲載して貰い、後日これを本書に転載することにする。



豆秋の事ども



麻生路郎

豆秋君が五月四日の未明に亡くなった。

未亡人の識では、永い看護で疲れていたのに「ちよっとやすませてもらいまささ」と、次の部屋でトロトロとして、五時すぎに、枕許へ行つて声をかけたが、既にいきを引きとっていた。からだにさわって見たら、温くみがあつた。そうだが、それきりだったとのこと。

川雉三月号の「川柳塔」に暮れてゆく如き往生したいものという句を發表していたが、希望通り静かに永遠の眠りについたのであつた。

病名は直腸癌であつた。自分でもガンであることを知り、死期が刻々と迫っていることを悟つて、せかず、騒がず、死後の準備をしていた。

川雉六月号の「川柳塔」には

短冊のけいこでもして死を待とう

という句を寄せていたが、その發表を見ずして逝ってしまった。

私が、それらの句を選をしたのが、死の前夜の十一時過ぎであつた。投句十句のうち、三句まで癌の句があつたが、私は三句とも厚く感謝致します。

（私の机の抽斗に「川柳日誌」というのが四冊と外に一冊あります。これに私の創作吟、句会吟等の全作品を収めてあります。本社で保管していただければ心残りがないと存じます。）

先生は川柳のおかげで、明るい人生を送らしていただいたことを厚く感謝致します。

月 日

須崎豆秋

麻生路郎先生膝下

とだつたに違いない。死ぬ前日の午前中に、私の遺書を投函させている。遺書は亡

最後の川柳塔別巻

大阪市 須崎豆秋

瘦せてゆくのを撫でて見る顔の骨
狸より短かい寿命とはさみし
院長があかん言うてる独逸語で
短冊のけいこでもして死を待とう

豆秋句抄

みの虫のなんぼ飼うても壁だった
出勤へヒヨコがすこしついて来る
恐わい風だったと雀しやべり合い
骨立てたまま二次会へついて行き
看板の裏で茄子の花が咲き
降りる客いとんのんと続くなり
行くあてもなく傘をひろげし
いわしいわしなすびなすびの日がつづき
阿呆なこと云うてもうて淋しけれ
長靴の中で一びき敷が暮し
手を振って見ても手ブラは淋しすぎ
たのしみに満つ湯豆腐がうごき出し
面憎いほど妾宅がならんでる
火葬場は火をつけてから夕涼
直角に質屋の中へ折れ込んだ
ドロドロと貧民窟へ陽が落ちる
貧しさを猫の顔して笑うて見た
けなげにも家主の犬を噛んで来た

愛犬ボス

ると、多少とも気分の良い日に書いておいたものであろう。

この遺書にある「川柳日記」の四冊は彼が俳句生活に入った昭和三年から、昭和三十六年の四月までの作品集であり、その句の発表誌や選者名まで、たんねんにしるされてある。あとの一冊は彼が感銘した他人の断片語と、川柳家の作品の抜き書きである。彼は金銭には至ってでんたんであった。三等重役になっても、浪六の八軒長

屋式長屋に二十余年を一庶民として終焉の日まで、長屋のひょうきんなおっさんとして送ったのであった。誰が見ても、楽道家として受けとれた彼のことであるから、何かにやりっぱなしかと云えば、むしろその反対で、実にさちよう面な性格の一面を持っていた。彼が以前勤めていた会社から、今の会社へ会社と共に譲り渡された一

事でも、いかに勤勉で、きちょうめんであったかは想像にかたくないのである。今の津村製作所の社長の信任の厚かったことは云うまでもない。社長の女房役としての存在として陰日向なく働いていたことは、社外の私等の脳裡にもしんとしている。それは戦後のあわたしい時代に、

元旦だ一二の三で跳び起きむ

の句がそれを証明している。たれ

かれへの遺書や、生前に形見分の処置、自己の作品の整理等々、何から何まで、立つ鳥あとを濁さず式にやっている点、一寸真似の出来ない芸当である。

彼は中学時代を養家先に送り、その頃文学青年になって短歌なども作っていたらしい。一年志願兵で、入隊した頃、既に彼の飄逸な性格が首を擧げていたことは彼の雑筆からもうかがうことが出来る。

彼は母をこよなく愛した。友情にもあつかった。何びとに対してもけんきよであった。動物などにも熱情を傾けた。彼の句には犬や猫やその他の動物を詠んだ名句がずいぶん沢山ある。

彼は清廉で正直だったが、ちょっとどもったので、酒でも呑まなにかぎり、あまり意見は述べなかつた。彼の怒りは常に内攻的であ

った。

政治や社会に対するふんまんも、すべて句を透して、皮肉や諷刺として吐き出していた。豆秋さんは変屈だんなという人たちも、その変屈からにじみ出てくる句の洒脱や飄逸さには魅力を感じ、愛すべき豆秋として流派を超越した豆秋ファンは全国にわたっている。

単なる変屈でなく、筋金の道入った苦勞人としての変屈さであることは、誰しも認めることであろう。

彼のようなかげがえのない作家を失ったことは、柳界の一大損失だと云わねばならないだろう。彼の逸話などを書けば際限がないから他日に譲ることにして、茲に謹んで君の冥福を祈って筆を擱くことにする。

豆秋さんを悼む

麻生 蔑乃

午後の便たった一通それは遺書

抽斗の中もかたづけ死出の旅

句会へも又出る君と思いに

河豚食うて別れを告げに来たも君

君こそは庶民の中に立つ詩人

隠し芸音痴の機智も働かせ

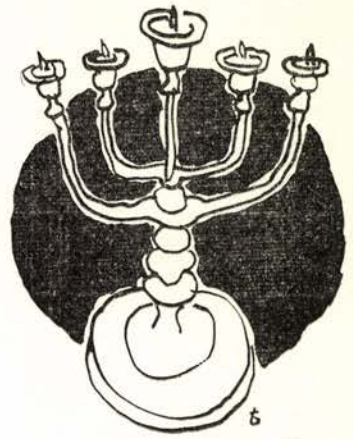
ビョイビョイとうなぎ大中小にわけむかしむかし稼げば楽になりしとか葬式で会いほろいことおまへんか腕時計見い見い仏説阿弥陀經速よいかな消えてしまおうと火事見舞元旦だ一二の三で跳び起きむ文楽の眉はバチバチ音がする

閑 職

モヤモヤがいちどに晴れたみことのりちちははにめぐりあいたや靴みがく啄木の真似してカニにはさまれた春うらははさみほうちようかみそり研ぎ秋風の中で乞食に拝まれる

ベカコしたような顔だが流行っ妓今晩は台風だとさコスモスよ寝ころんでいずに蠅なと捕りなはれオーライで動き出したる霊柩車吉田さん三振しても引っ込まずうそ寒き告別式の道しるべ

恋人の坐ったとこへ坐って見イヤリングいやよいやよと揺れているよし来た博士が踊る奴さん機関車も一人走って見たかろう腕時計動かなくてもいいのんよやれやれと安心してる棺の中鱧の皮キュッといっ杯もう駄目かやせすぎて検温計がはさまれず惜しみなき命檀山行の歳暮れてゆく如き往生したいもの



ふるさとの螢が夢の中をとび（豆秋）

ああ豆秋さん

柳壇の一茶とまでうたわれた、須崎豆秋氏を悼んでつづる柳友の手向け。
ああ悲し。

豆秋君を悼む

中島生々庵

五月三日は私の亡母の十年忌に当るので、老妻を連れて念願の善光寺おあきしに参詣した。四日の夜十時半上六着の近鉄で帰って来たが何となく気になる出来事が待って居るようで、電車の中から留守宅へ電話して見た。果して悲しい報らせが待って居た。豆秋君が今朝亡くなられた！先月二十八日浜寺支那で大分弱って居られる話を聞いては居たが、こんなに早くお別れするとは思って居なかった。ので取り返ししのつかぬ残念さがこみ上げて来る。

丁度一年前の六月末大手術後一週間位の頃を見計って不朽洞会を

代表して梅里副理事長とお見舞に行った。相当に思い切った大手術と時期的に少々手遅れの感があったのと、それに暑気も日々加わって極度に弱っては居られたが、豆秋君の資性と云うか、川柳魂と云うか、見舞人を驚かせるような明るい顔付きで手術の模様やら、毎日のガーゼ交換の大変な事、絶対安静の困難さをユーモラスに話して呉れた。枕元に手帳と鉛筆を置いて句を記しておられるのも豆秋君らしい当然さである。院長には手術中でお目にかかれなかったが医局の小西博士から詳細に経過も承わり、別出された患部のフオルマリン漬けも見せて貰ったり、顕微鏡の標本も見せて貰った。総合すると悪性の癌ではないとの結論であったが、老齢と大手術の影響がどの程度に耐えられるかが問題であるとの事であった。再び病室

に引き返してその旨を報告して本人にも奥様にも元氣一杯に闘病すれば悪性ではないから全快の日は期して待つべしと元氣をつけて帰って来た。それから丁度一年目である。刪々乎として一人旅に出た豆秋君を想うて涙がこみ上げて来る。「四百四病撰りにも撰って癌を病み」と云う句を最近作られたそうであるが、豆秋君の旧作には「病人へみんなたかつて嘘を言い」がある。柳友としても医者としても一入胸が痛む句である。心から合掌して御冥福を祈る。

純粹な川柳愛

清水白柳

昭和三十五年三月号に、豆秋さんと私が、柳信頂上会談を書いた

ときに、豆秋さんが「禿は長生きすると書われているが、『光笑会』の会員のうち、禿山、里十九、艸染、かはる、と既に半数が他界しているのを見ると、禿の長生き説もあんまり当てになりませんが、生き残っていたからこそ、君も私も、『頂上会談』で映画のプリンナー以来の、茶瓶ブームの再来の日にも出くわすことが出来たというものです」と結ばれて居るのですが、その生き残りの豆秋さんが、私の心の中に大きな穴をボツカリとあけて亡くなってしまいました。

四月十六日の午後、何だか急に豆秋さんに会いたくなったので、突然にお伺いして豆秋さんの枕許で、しばらく話をしたのが最後になってしまいました。身体にさわるとうけないと思つたのですが次から次へと川柳のことをしゃべられるのでこちらの方がハラハラしてしまつたようなことでした。

その時の話も、川柳雑誌のあり方を中心にして、路郎先生の御健康のことや、柳友たちの消息などでした。今となつては遺言を聞いたようなことになってしまいました。

もう再び聞くことの出来ない豆秋さんの心の中を推しはかつてただ涙するばかりです。その純粹な川柳への愛情こそ、あのだれにも真似ることの出来ない句となつて

はとばし出たのであらうと思われるのです。

朗らかだった豆秋さん、とつとつと語る豆秋さんの姿がいつまでも目の中に残っているのです。まだまだ生きていてはしなかった豆秋さんを連れて行ったのはだれなのか。

禿なでて豆秋さんと呼んでみた
白柳

万よし店のころ

橋本緑雨

君と川柳で親しくなつてから三十余年になる。初めて逢つたのは昭和三年の夏ころ、道頓堀新戎橋南詰の上かや、万よしの店で（万よしは後に川柳雑誌不朽洞会員、大阪市会議員）庄健夫人の「ため」さんに豆酒と紹介されたが秋ころ豆秋と改められた。

万よしの店内の川柳に佳句をどしどし発表されて居られ、ビールを飲みながら川柳を語り、また一方勤め先の方や友人を誘つて川柳尖鋭会を創立、天王寺区大道三丁目内藤製作所内で毎月の会に私も出席をした。時々公二、雨町、翠人その他川柳の不朽洞会員を誘つては行つたものである。昭和五年三月川柳の社友に推薦と同時に天王寺支部を設立に尽力され、中野

裸人（後往友）鋭峯、柳結、鬼堂の外敷名あつて川維支部として活躍された。

昨年の夏入院している事を、亜純氏から聞いて二人で見舞い、更に本年二月自宅へ行った処、臥して居られたが、元気に語り近々勤務するかのように言うから、春になったらぼつぼつ会社へ通っていると便りが来るかと待っておった処が路郎先生から電話で君が永眠の知らせをうけたので驚いた。

君の死は柳界のためにも柳友にも心残りがするが、多くの佳作を残してくれたことは永遠に伝えられることであろう。

この町に豆秋がいたと知れ渡り
緑雨

飄逸奇行の人

市場没食子

療養の甲斐もなく豆秋さんが黄泉の客となり、あの世とやらの柳界へ逝ってしまった。寂しいことがまた一つ出来た。

豆秋さんとは昭和三、四年頃週刊朝日だったか、サンデー毎日だったか路郎先生選の柳壇へ投句していた頃からだった。入賞率も抜句も常に高かったので自然と、豆秋と言う名が頭に残り、果ては及ばぬ対抗意識まで出して、ともし

れば決り勝ちな私の作句意欲を奮い起させて呉れた。一年余り後ふとした奇縁で川維本社句会に出て名乗り合ったのが知り合いの始めで、その時氏も私の雅号を知っていて呉れた。以後柳唇が旧くなるにつれて親しさの度も増して行つた。私が今里支部をやっている時にも応援してくれたし、千石荘の体温川柳会も後年路郎先生を補佐して私の代りをしてくれた。

支那事変で私が征く時も、本社の壮行会も門出の日もあの童顔を覚えてくれた。拙宅へも二、三度来てくれたが、戦後布施の腹見市場で天ぷら屋をした息子の手伝をしている里十九氏を煩わして、氏と鮎美氏や、愛論、史葉等十幾人も寄つて「天ぷらを喰う会」をやった時の印象はまさき目に付く。

パチンコの上手さも愛論氏と双壁だろう。常に童顔、飄逸奇行、漫言、それがあの独自のユーモラスな句を生む因だったろう。誰にでも好かれた豆秋さん、今は逝し悼々合掌。

五月雨の中を黄泉へ出た豆秋

ああ豆秋さん

西尾 葵

五月五日の子供の日に、豆秋さんのお葬式がありました。子宝に恵まれなかった豆秋さんは、犬や猫を大変可愛がってりました。丁度一茶や良寛さんのようでした。おつむの具合も良寛さんや一茶によく似たはりました。

去年の六月に、西下病院へ入院しやはったという知らせを、梅里さんからもらつて早速見舞にゆきますと、明るい奇麗な部屋で例の訥々とした口調で、箸をもって入院して来たのに、ここの食事は箸にかかるものを食べさせてくれません、流動食許りで、スプーンで食べるもの許りですねんハハハハと例の好人物然とした笑顔で話されてました。

あれから丁度一年、曇り空の五月五日の午後四時過ぎ、豆秋さんの柩は瓜破の霊園へと運ばれてゆかれました。今度は箸もスプーンもいらんものを食べてます、それに俺の葬式の日には子供の日やっただから、日の丸の旗がたてられていてなと、豆秋さん独特の話題で、格好の良いおつむを斜にして眼鏡の奥の目を細くしていやはることでしょう。

既に今年の二月に書いておられたという四通の遺書が寝床の下からなくなると同時に発見されました。その中の一通の、奥さんに宛てられたのを、お通夜の晩に読まさせてもらいました。自分は

五十二才の今日になって初めて遺書というものを見てももらいました。遺書という固苦しい、いやなものと思っていましたけれども、豆秋さんの遺書の書き出しに「あなたはんわ」と奥さんのことを、

ずっとあなたはん、あなたはんと呼んで書いてありました。死を覚悟して書かれる遺書に尚且つ豆秋さんらしい、全く豆秋さんらしい御夫婦の仲をみせられた、ほのぼのとした温かい遺書でありました。読み了つて謹んで、遺書を奥さんにお返ししました時に、上品な奥さんは、私にはもったいない良い主人でした、と一言ボツリと言われました。小じんまりとした奥さんと豆秋さんはホントウにお似合の御夫婦だったなとつくづく祭壇の着物姿の写真に合掌いたしました。謹んで豆秋さんの御冥福を心からお祈り申し上げます。

豆秋君の手紙

土井 文蝶

豆秋君が亡くなった、おいおいこちらへ順番が廻つて来そうで心細い。さぞ今頃は極楽で川柳句会でもやって居るような気がする。それ程豆秋君は人柄に円味のある非常に友情に厚いそして洒脱味のある人だ、僕なんか足元にも寄

れをうになかった。僕が病氣して入院中にはしばしば見舞状なり、自身の近況を知らして呉れたりした。その手紙を公開して豆秋君の想い出としたい。原文のまま。

拝啓、次第に御快方のことと存じ上げます。小生十日程前に飛田北門前の散髪屋で、後頭部を、ジャックでチカッと傷つけられ、おまけに眼瞼も剃刀でチョツとやられてそれぞれにバイキンが這入り、眼の方は四五日間眼帯をして片下左膳になって居たら治つたが、後頭部の方は悪質な、疔と診断され未だに日赤アベノ分院へ通つて居ります。もしこの疔が顔面のわるいところだったら所謂面疔で、小生も今日あたり、二タ七日目のお経を上げて貰う運命だったのです。禿け頭なので「コー薬」がツルリツルリとすべつてしまいたがないので、不要になった眼帯を後ろへ廻して「コー薬」止めにしてあります。何の事はない三ツ目小僧の化けものをそっくりです。十二月の本社忘年会までには癒りそうもないので弱つて居ります。君もアルコール性水薬の方は止めて居るので淋しいだろうが、小生も疔のおかげでスッカリ止めて居ります。此の際一層甘党へ転向してやろうと企だてて「サンバーワン」や「木村屋」などで甘いものの

稽古をやつて居ますが、食堂のフンイ気がどうも私の柄に合わず、これは何が何でも早く繕つて、辛党へ復帰せなならんと思つて居ります。君も早く繕つて新年には久しぶりに黄金色のお屠蘇を祝つて再起勇躍せられんことを切にお祈りいたします。

奥様へ何卒よろしく、敬具

十一月二十六日

土井文蝶兄

須崎 豆秋生

これは昭和三十二年十一月二十六日付け入院中に貰つたものです。その後僕が退院したあとにこんな手紙もあった。

それはそうと君も退院後快方と思つて居るが当分アガコーン性水薬だけは我慢して元の健康を取戻していただきたい。小生も例のデンボが人工衛星のマネをして、一号が鑑ると二号、二号が鑑ると三号と、現在では三号にコー薬を貼つて犬に吠えつかれそうな恰好をして居り、一滴も召し上らぬ路郎先生を見習つて、小生としては珍らしく酒無しの正月をしました。先生、文蝶、豆秋というベストブリーが飲まぬのでお酒の値が下つて、税務署が狼狽して居るらしい、君も一日も早く全快して三人で乾盃しようではありませんか。

敬具

これは三十三年一月八日付けだった。その後三人で乾盃をする機会のないままに僕は全快はしたが、豆秋君は病気になる、あらゆる手当の甲斐なく憶い出の款々と名句を残して死んだ。豆秋亡くとも君の句は生きて永遠に人々の胸を打つに違ひはない。嗚々豆秋。

川柳界の良寛

— 豆秋さんを悼む

松 江 梅 里

川柳人で豆秋の名を知らぬものはもぐりであると云つても過言ではあるまい。

大万川柳の生みの親であり、私の川柳の育ての親の豆秋さん、遂に幽界の人となられたことは返す返すも痛惜に堪えない。川柳を通して豆秋さんの人柄をいつも敬慕していたのは蓋し私一人ではなからうと思う。

今から二十年前私が川柳を始め、既に豆秋さんは堂々たる有名作家であった。洒脱でうま味のあるあの句風に打たれ、当時かけだしの私がいづになつたら豆秋さんのような作家になれることや、一時はあまりにも自分の無能に愛想がつきて、川柳から足を洗おうと決心したことが幾度か。く

さりきつていた頃、句会で「ハイヒール男であつた旭町」と云う句が豆秋さんに認められた。あまり大した句でもないのに、態々書信で感想文まで添えて敬賞していた。まさに消えかけていた私の川柳灯に活を入れてくれた恩人である。

阿倍野文部と云えば現在でもそうとうたる顔ぶれの集りであるが、当時は今の元老株が一騎当千の勢いであつた頃阿倍野王子神社に句会場を持っていた。その時豆秋さんから無名に等しい私に梅里さんと声をかけられた嬉しさは、今も忘れることは出来ない。その後席題の選者に抜擢されたときは吃驚してお断りしたが、並み居る有名作家の中で、それ程高く買われた感激に私は真剣に川柳と取組むことに決心した。爾来十数年いつも激励してくれたのは豆秋さん、殊に大万川柳には創立以来隆武者として尽力下さったこと、今日既に十年の歴史を飾ることが出来、全国にその名を知られるようになったのは豆秋さんの功績があればこそと思う。

病篤き中に既に覚悟の遺書數通。お世話になつた会社の社長、同僚従業員へ、路郎先生へは川柳に依つて私の生涯は幸福であつたと報恩のまごころを切々と述べられ、唯一の財産である豆秋句集四冊は、川柳雜誌社へ寄贈される旨また奥さんには葬式のことから後事のことども細々と記され、借金なしとは豆秋さんらしく、阿倍野支部の十哲梶子両氏へ綿々と記され、また御近所の一軒一軒にまで子供のない妻のことをくれぐれ宜敷く頼むと、何れを見ても涙なくしては読むことが出来ない。

古稀には全国川柳行脚をしたい念願を持っていた。それが突現出来なかつたことはさぞかし心残りであらうと思う。

絶筆の私の短冊「杉になりたや千年と云う樹齡」

五月九日 初七日 合 掌

独自の句風

菊沢小松園

非凡な凡人豆秋さんが死んだ、突然の訃報を聞いた時スーと体の一部分に大きな風穴が出来たような衝動に駆られた。誰にも愛され誰にも親しまれて居た豆秋さん、不幸終に病魔には勝てず黄泉の客となった。

数多い友人の中の数少ない得難い存在だった。その独得の句風は豆秋さんそのものの人の現われで実に人間味豊かな佳句名吟を残された。惜しい、淋しい。

ヒゲそり後に…

- 美容衛生剤 G11
- アラントイン
- 水溶性ラリン

配合

男性 200円

アストリンゼン

川柳人として生まれて来たよう、名利に活潑、時流に押し流されず、川柳の醍醐味を身を以て示して来た豆秋さん。斗酒時代から三十年來の交遊の間、常に暖かいヒューマニストとしての豆秋さん。もう少し生きさせ度かった。生きて貰いたかった。そして是れこそ本當の川柳だと、人に誇示する句をもっとと見せて貰いたかった。名句得難し又その人得難し。明治も愈々遠くなりつつあり、飄々乎として雲の彼方に去つて逝つた豆秋さん、静かにその御冥福を祈るのみ。

五月八日夜

追 悼

合 掌

その次の一句は蓮の上へ書き
小松園

川 阿倍野支部へ

豆秋さんの遺書

金井文秋

豆秋さんが逝くなられた報に接した時、豆秋さんの思い出が次々と湧いて出て来た。私が初めてお逢いしたのは、昭和十七年頃川柳にちょっと嫌気をさしていた時である。やさしく励まして下さったのを覚えている。それから十年、あべの支部へ来てから豆秋さんと直接に話をする機会が多くなつてからは、豆秋さんの人柄に、だんだん敬服するようになっていた。めったに自慢する事のない人、いつも遠慮がちに坐つて居られた人、話をするのにも訥々として調子のユーモラスな事など、思い出しに限りがない。

豆秋さんはいへん筆まめな人であつたらしい、けじめけじめはちゃんと手紙を戴いた。随分奇抜な手紙も、あちこちに残っているそうだ。これもその一つ、五日葬儀に参列するべく準備をしていた所、冥土から第一信? が届けられた。(消印は四日午前八時十二分)

川 阿倍野支部のみなさん、お秋れいたします。

生前の御交誼を厚く感謝しながら、朗らかな気持ちで川柳往生をいたします。

(私の川柳に関する蔵書全部「貧弱なもんですが」を支部へ寄贈しますから皆さんでお配け願います)

それでは阿倍野支部の発展を祈りつつ、お先へ失礼いたします。

同人のみなさんへよろしく、さようなら。

月 日

須崎 豆秋

金井文秋様

(原文のまま)

死を悟りきつた川柳人でなければ書けない文面である。十日以上前から遺書のつもりで奥さんへ預けて置かれたものらしい。豆秋さんの冥福を祈りつつ、一句霊前に捧げます。

ふるさとを残しておい遠い旅 文秋

遺書へ台掌

不二田 一三夫

五月四日午前五時ごろといえ、ボクはまだ眠りについていなかった。窓のガラス障子が白みかけていた。ちょうどこの時分に、一代の名作家須崎豆秋氏が生死の線をさまよっておられたのであ

る。「ちょっと疲れたから、ひと眠りさせてもらいますよ」

とら夫人は、そう言って二時間ばかり横になった。足腰をさする何か月間がつづいていたのである。

二時間はかりウトウトして、また腰をさすりにふとんへ手を入れたところ、おかしい? もしや? と、豆秋氏の顔をのぞくと安々と永遠の眠りについた大往生の姿であつたという。「息が絶えたら書き遺した手紙を諸方へすぐ出してほしい」と、日頃から堅く言われていたので、豆秋氏の遺言は直ちにポストへ投げこまれた。——路郎先生宅へはその日の午後二時ごろに遺書が配達されたそうである。

もうあかと覚悟したので「わかれの言葉」を書きのこします。

こういう見出しをつけて、奥さんから、会社の津村社長、川柳関係、町内の人々にまで鉛筆で別れの言葉を書きのこされたのである。その最後には出生地の香川県坂出市から終焉(えん)の地となつた阿倍野区旭町、そして墓まで淡々と書かれてあつた。遺書の一番はじめは奥さんにあてたものである。

あんたはんは、私のわがまま

生活で長い間苦勞をかけて、何一つ楽な目をささず、一生のどたん場になって思いもよらぬ大病にかかり、あんたはんが寝食をわすれての介抱をしてくれたことを心の底から感謝しながら、一足お先きへ失礼いたします。

あんたはんは、貴族年金その他で貧しいながらも暮らして行けますから高鳴さんへお願いして、この町内(こないない町内はありません)で居らしていただき健康に注意して達者で長生きして下さい。

たいへんお世話になつたこと幾重にも感謝しておわかれいたします。

妻へ さようなら 清次

豆秋須崎清次氏は明治25年9月10日生まれ、とら未亡人は明治23年9月20日生まれだから、二つ年上の姉さま奥さんであつたわけである。六十九才の豆秋氏は壬辰、とら未亡人は庚寅で正に竜虎の天と地のご夫婦であつた。しかし

生活で長い間苦勞をかけて、何一つ楽な目をささず、一生のどたん場になって思いもよらぬ大病にかかり、あんたはんが寝食をわすれての介抱をしてくれたことを心の底から感謝しながら、一足お先きへ失礼いたします。

大阪一名古屋 2時間27分
ノンストップ



近鉄特急

大阪上本町発	7.00	8.00	9.00
	11.00	13.00	15.00
	17.00	18.00	20.00
近鉄名古屋発	7.25	8.25	9.25
	11.25	13.25	15.25
	17.25	18.25	20.00

ほかに 大阪・名古屋連絡
伊勢 特急 運転
座席指定 特急券
お求めは 各乗車の5日前から

近畿日本鉄道

優しい田舎なご夫婦であつたやうである。

遺書のなかで特に豆秋さんらしいと思つたのは、

葬式はごくかんたんにして下さい。

香典供物はかたく御辞退すること。

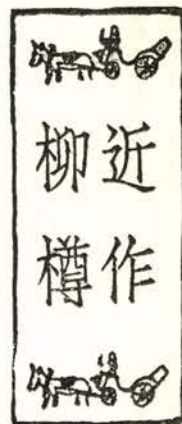
お通夜だけは御馳走をして大いに飲んで賑やかに陽気にやつて下さい。

感心したことは、相当長文なのにただの一字も、誤字、脱字のなかつたことである。

川柳入門そうそう大阪市民文化祭で市長賞をもらった時、「太陽が露路を素通りして昇り」の拙句へ、豆秋氏はわざわざ灰皿に祝吟を焼いて拙宅へ持ってきてくださった。

このところ旭の昇る如くな

豆秋生



麻生路郎選
北川春巢選

裸婦一枚定期の裏にひと住み 熊本 田口 麦彦
 ゴルフセン 人間を飼う檻に似て 同
 スキ ダール 待つてましたと週刊誌 同
 十七才ぜんざい好きでホッとする 同
 恋人をみつけるまでの友の会 同
 男一匹小躍りをしてスポーツ紙 同
 学歴は問わない職が鋳物工 同
 大遠忌豆かえりみぬ屋根の鳩 京都 大久保 和三部
 団参の輪袈裟へ京の花が散り 同
 金力の悪魔古蹟へブルトザ 同
 それぞれの夢へ団地の窓が消え 同
 云うている程にも見えぬ手術跡 同
 逢えそうなのな気がして花の道 西宮市 末沢 花美
 春おぼろ当にならない人を待ち 同

花を絶やさず夢多き日を病んで 同
 アマリリス活けて待つて人が来ず 同
 案外な見舞のたかをけなるがり 兵庫 河原みのる
 家計簿へツバメ見た日をかき添 同
 農基法どうなろうとも種を蒔き 同
 とのさまになった心地の花見酒 同
 ハイヒールの埃月曜味気なし 神戸市 波多野 英由起
 幕間に南京豆がまわって来 同
 立体音楽に まほろ ラジオも かき 出され 同
 スキーブームに乗 て 足を折 て 来る 同
 珍客にされて無心を引っ込める 堺市 山本 素郎
 打ち水のついでに隣家覗いとき 同
 壮健で貧しきことを羨やまれ 同
 せめてもの慰み水滸伝を読む 同
 労働者らしい奴が先に立ち 大阪市 花月亭 九里丸
 今叱った孫に小便すてさせる 同
 写経しつつ往時の浮気北叟笑み 同
 希望校無事に通って母寝込み 高知市 須藤 俊江
 まだピンク似合うと おだて 同
 レントゲンがく然とする影うつし 同



七面山氏の

二つの句意について

河村日満

本誌四月号に直原七面山氏は、「二つの句意について」という小見出しで、野田素身郎氏の「ひき逃げはそんな大物とは知らず」の句を引用されて、いろいろ述べておられます。勿論私も助詞代入の五句についての解説につきましては、成る程と肯定こそすれ否定する者ではありません。しかし「その後ためしに、この句についていろいろの人に意見を聞いてみますと、十人の中八人までは、やはり私が最初感じたように「ひき逃げ犯人が大物」と了解するので、実はこれこれと説明します」となる程を云えば被害者が大物ともれますね」と云うことになるのです」とありますが、ここに私としては異議を唱えねばならぬ理由を見付け出してしまふのであります。「十人の中八人まで」とあります十人が、どの方面の方々であったかは知りませんが、川



親の目にうちの十七まだおほこ	竹原市	山内 静水	東京弁ききづらいよな出世談	同
愚痴いうてならん四五日臥て悟る	同	同	オルガンの練習聞けば流行歌	同
よく見ればストリップの肌荒れ	同	同	万引きの見える角度に鏡掛け	大阪府 高橋 尚史
今朝逢うミセスかつぎ屋赤い足袋	芦屋市	里田一ノ十	病んでいる不幸忘れる程に病み	同
嵐山へ出て一息を水も入れ	同	同	歌わせて歌声喫茶は儲けとり	同
縁談を庭師が持つてくるも春	同	同	椅子に片あぐらで会議馴れて居り	青森県 木村 涼人
貯った旅に出ように妻笑い	東京都	奥津啓一朗	経歴を村閑人にして置かず	同
夫婦してたまさか出るに子にくどし	同	同	浄財になる日の紙幣の皺を伸し	同
舞台より背なの気配に氣をとられ	同	同	観光地乞食の親子見て戻り	鳥取県 鈴木村 諷子
いさん逆立ちして見せる	大阪市	堀 風船堂	万の寄附へ折詰一つ届けられ	同
朱雀門衛士もねむたい春がすみ	同	同	飲めばいい男しやべればいい女	同
改札のいらちパチパチ空らパンチ	同	同	着物みな蒲団の柄のようになり	兵庫県 護川 梢月
恋人は居らず桜の木にもたれ	兵庫県	遠山 可住	死人より泣く母親へもらい泣き	同
灘の酒帰って来れば桜が咲き	同	同	おねまきで桜楽しむ療養所	同
月給取りがクーペで通う御時世や	同	同	春の陽一ぱいコークス拾う主婦	竹原市 杉原 愛鳩
七年目の生命が妻への土産なり	香川県	大垣たもつ	千円札どこで使ったかなあと春	同
重荷にはなるまい米とぐ妻の背へ	同	同	二人のいとスムースに飲むはなし	同
ようように口説いた別府行時化	同	同	大阪の娘の贅沢を見て戻り	岡山県 安藤 祥男
飲助は新調もせず氣にもせず	香川県	三井 酔夢	百姓のする贅沢でたかが知れ	同
			何時からか働く妻のいびきかく	同

柳作家であったことは確かでありましよう。それにこの「ひき逃げ」の句が、七面山氏の云う意味のように、「ひき逃げした方が大物」と解しられた多数の人々の、川柳経験年数も合わせて知りたかったと思うのであります。と云いますのは、私はこの七面山氏の文章を読んで、反対の立場にたつものであるからであります。そんなことから四月九日の鳥取川柳会の句会を利用して、この句の解釈を、この日集った諸兄に聞いてみたものであります。ところが七面山氏には大変お気の毒なことであります。私が反対に立ったように始んどが（何故始んどというかは中にはつまり意志表明をせぬ人が居たため）作者が説明されたように、解したものであります。勿論集られた人の中には、すでにこの文章を読んで居られた人もおられたのであります。が、八歩

本

福壽司

心斎橋筋大丸前

電話の三三四四番



呑み過ぎて死んだ仏に酒供え	宇部市	村上 竹生
注射してすめば敷がさす程に云い	同	同
社宅街屋根から攻めてくるテレビ	同	同
栄転を他人はコネのせいにする	宇部市	平田 実男
金よりも奴にだまされたのがく	同	同
セーターへ妻にもあった胸の線	同	同
令嬢の恋に張り切るトヨベツト	大坂市	木村 草々
安ベッド通天閣の見える部屋	同	同
美術館あの日おさげの妻なりし	同	同
神経のひとつをしびれさす凶星	新大塚市	吉田 俊和
たまに来た役所うろうろして疲れ	同	同
血圧を他人が気にする顔の艶	同	同
他人皆幸福そうに見えて春	西宮市	鶴飼 鮎子
機嫌よい時はほうれん草迄ほめる	同	同
七年ぶりに旧友に会って	同	同
お互いに子供であること発見し	同	同
百姓の鉢巻ストでない話	山形県	菊地 白葩
好天にめぐまれ座談会の人まばら	同	同
人生のはかなさなどとテロ云わず	仙台市	平野 光道
瓶の酒減りゆくを眺めている孤狼	同	同
宇宙を飛んでもピンと米ぬ暮らし	宇部市	神田 豊年
生き甲斐を見つけたような新学期	同	同
もう年か拡大鏡を便利がり	須崎市	高橋 蟠蛇
へそくりが貯まれば孫の数が増え	同	同
お互いにはげまし合うも恋のうち	滋賀県	土守 蜻蛉
友達がぼっくり死んで春寒し	同	同
共稼ぎ花見に行けぬ疲れよう	倉吉市	渡辺 乱坊
大雨になってから花の山を降り	同	同
ふぐ祭りまじめな顔でお経あげ	兵庫県	斉藤 たけお
アンテナにつぶされそうな家に住み	同	同
長いものに巻かれたが抱いてはく	豊中市	土井 北桐
離別しても当座凌げるだけは貯め	同	同
物体と化し病室の壁へ向き	八戸市	伏守 和徳
親のいう通りに生きて小商人	同	同
合格へこれからの苦は金のこと	鳥取市	近藤 昭夫
さっぱりしたでしようと停年慰め	同	同
いい天気とにもかくにも出ると	本ノル市	並木東田楼
嬉天下亭主居るやら居ないやら	同	同
飲む時の笑顔をいつも見せて欲し	宇部市	鎮浪 翠月
落ちぶれて知る世渡りのむずか	同	同

氏、湖山氏のように全然何も知られずに居て、自己の意見を發表されたあと、そんなことが書いてあるのかと、あらためて読み直された人のあることを書き添えれば、私が故意に自分の意見に同調させようとしたことがないことは、判斷して頂けるものと思っておりますが、果してひとりよがりでありましょうか。

さて、何故私がこの句に對し、七面山氏の見解と違ふかを申しあげてみましょう。

○ひき逃げはそんな大物とは知らず
先ずこの句の問題点は、上五の、しかも助詞の「は」にあることは疑いのないところでありましょう。そこで私はこの句を斯様いう風に解してみました。

「ひき逃げをしたのがそんな大物とは知らず」なのか、「ひき逃げはしたがそんな大物とは知らず」なのかに分けてみました。そしてこれを十七音字にまとめあげてみたのです。そうしますと次のようになるのです。

○ひき逃げがそんな大物とは知らず

○ひき逃げはそんな大物とは知らず

これにより私は、やはり後句にまとめられたと信じたのであります。勿論私は、この句を讀んだときから、直感的に作者の意圖の通



中年の恋別々に切符買う	兵 黒 田	中年の恋別々に切符買う	兵 黒 田
振り向かぬ寡婦のモンペの色が	同	振り向かぬ寡婦のモンペの色が	同
サイレンの霞の中に有る余韻	玉 野 市	サイレンの霞の中に有る余韻	玉 野 市
良心にほろい儲けの邪魔をされ	同	良心にほろい儲けの邪魔をされ	同
東京を見て来て大阪が性に合い	大 阪 府	東京を見て来て大阪が性に合い	大 阪 府
貰い子のアルバムに見る気の配り	同	貰い子のアルバムに見る気の配り	同
母の手も添えて社殿の鈴を振り	松 城 市	母の手も添えて社殿の鈴を振り	松 城 市
うち風呂の順を狂わす夜のテレビ	同	うち風呂の順を狂わす夜のテレビ	同
鯛網も眺めに入れて瀬戸の海	愛 媛 県	鯛網も眺めに入れて瀬戸の海	愛 媛 県
スラれたと思えば安い酒代よ	同	スラれたと思えば安い酒代よ	同
網棚に桜忘れたよい機嫌	大 阪 市	網棚に桜忘れたよい機嫌	大 阪 市
花嫁に附添う方が厚化粧	同	花嫁に附添う方が厚化粧	同
書留で学生夫婦又遊び	布 塚 市	書留で学生夫婦又遊び	布 塚 市
春雨へ乞食鼻唄で歩き出し	同	春雨へ乞食鼻唄で歩き出し	同
たまさかのレジャーを妻に牛耳	笠 岡 市	たまさかのレジャーを妻に牛耳	笠 岡 市
値上りのプレーキ主婦の署名帖	同	値上りのプレーキ主婦の署名帖	同
テレビでも見とれと邪魔を叱ら	児 島 市	テレビでも見とれと邪魔を叱ら	児 島 市
日曜日だけの早起き邪魔がられ	同	日曜日だけの早起き邪魔がられ	同
年代を競うブルの自家用車	大 阪 市	年代を競うブルの自家用車	大 阪 市
夜さくらの留守さ	風邪を引き	夜さくらの留守さ	風邪を引き
辻 文平	リバイバルブームへ若い日が戻り	辻 文平	リバイバルブームへ若い日が戻り
心窓をグツとゆき目に合	同	心窓をグツとゆき目に合	同
大相撲テレビ機敷で賭けて食	高 知 県	大相撲テレビ機敷で賭けて食	高 知 県
難産の効なく又も女子を産み	同	難産の効なく又も女子を産み	同
次々と男を変えて食って行き	守 口 市	次々と男を変えて食って行き	守 口 市
はみ出した末座小さくなって居	同	はみ出した末座小さくなって居	同
商魂は二百疊ですおいでやす	大 阪 府	商魂は二百疊ですおいでやす	大 阪 府
口止めに飲んでる酒でもうしや	同	口止めに飲んでる酒でもうしや	同
見舞い来る妻の苦労は眼のくまに	加 賀 市	見舞い来る妻の苦労は眼のくまに	加 賀 市
同病は異性一入憐れがり	同	同病は異性一入憐れがり	同
国会は国会俺は炭を焼く	玉 島 市	国会は国会俺は炭を焼く	玉 島 市
張り替えた障子に心恥かしい	同	張り替えた障子に心恥かしい	同
盆栽をくれる話になって賞め	松 山 市	盆栽をくれる話になって賞め	松 山 市
踏切の向うも貨車の数をよみ	同	踏切の向うも貨車の数をよみ	同
アンテナの林に桜咲く社宅	豊 大 津 市	アンテナの林に桜咲く社宅	豊 大 津 市
訪問は偵察という社宅の眼	同	訪問は偵察という社宅の眼	同
無理矢理に吞ませ話のわかる人	若 松 市	無理矢理に吞ませ話のわかる人	若 松 市
ホームバー実費とやらの酒の味	同	ホームバー実費とやらの酒の味	同
云い訳にとられ時代の差を感じ	下 関 市	云い訳にとられ時代の差を感じ	下 関 市
本心はとうに決まって云いそび	同	本心はとうに決まって云いそび	同
杉本 一鶴	りて解しておりましたから、つい	杉本 一鶴	りて解しておりましたから、つい
山川 勝子	こんな分け方もしてみましたが、	山川 勝子	こんな分け方もしてみましたが、
西口 竹志	これはむしろあとから付け足した	西口 竹志	これはむしろあとから付け足した
中岸 雄水	理屈であります。あんまり簡単な	中岸 雄水	理屈であります。あんまり簡単な
高岡 喜章	理由のため、七面山氏としては、	高岡 喜章	理由のため、七面山氏としては、
井上 旭峯	あつけにとられるかも知れませんが、	井上 旭峯	あつけにとられるかも知れませんが、
沖原 光雄	一句が二句の役目をし、しか	沖原 光雄	一句が二句の役目をし、しか
高津 紡毛	もその意味が全く正反対にとられ	高津 紡毛	もその意味が全く正反対にとられ
三上 春雄	る句とは、解し得ないのであり	三上 春雄	る句とは、解し得ないのであり
藤田 雪峰	す。唯この句について、私がこん	藤田 雪峰	す。唯この句について、私がこん
同	なことまで書いて本誌のスペース	同	なことまで書いて本誌のスペース
	をとるに値する句かどうかには、		をとるに値する句かどうかには、
	迷ってはおりますが。		迷ってはおりますが。

「駄目」について

加川 靖 郎

本誌五月号の不田一三夫氏の「西夏文字」を読みました。

「駄目」について、次ぎのような解釈は如何なるものでしょうか。

馬は本来人を乗せて走るもの、それなのに太っては始末におえません。荷馬車か耕馬よりか使い道がないようです。人間だって太っては脳溢血か心臓マヒの恐れがあります。からだ(體)という字は肥えたのではなく骨の豊かなという意味でしょう。

太の字は大、これは人の立てる形の大、大人一人望ある人らの人を、二人合わせたもの(大という字二つならべたもの)その一人を



旅行する話をうわの空で聞き	兵庫	常岡	孝風	民謡にくつろぐ宿の湯が溢れ	富崎市	野口卯之助
生涯を独身と決め安らく日		同		ペンネーム愛人の名を一字入れ	市施市	米田 美夫
隣室のささやきに酒追加する	大阪市	川口	弘村	行楽期雨と事故とに出そびれる	大阪市	藤原シユウ
思わざる事件で故郷の名が売れる		同		故郷よりの南瓜買うより高価く	大阪市	北村弥次呂
飲む事と奉仕は別のお世話役	ハワイ	宮政	周防	ウインクに計量器の針もちと狂い	愛媛県	片山 光福
花見酒梯子に変わり金が要り	松江市	岡崎	祥月	買い渋った株はどんどん値が上り	伊丹市	小川静観堂
炬燵から床のさくらでお茶をのみ	松江市	岡崎	雪美	くり返し読む就職の初便り	七尾市	松高 秀峰
芽も出さぬラン根気よく水をやり	神戸市	岩井	千甫	馬鹿をみた僕を私がおかしがり	大阪市	木村 太郎
三面鏡明けっ放しで行ったまま	大阪市	西本	保夫	煙突から下りて労組のカオになり	堺市	指吸 拳児
酒の粕などと貶して下戸真っ赤	表木市	高木繁太郎		月給を待っておれないワンピース	津市	嶋野ひろし
素うどんじゃごまかし切腹の虫	大阪府	佐伯	九紫	忠告が耳に入らぬほどに燃え	笠岡市	松本 忠三
かぜぐらゐる風邪でサンパツま	金沢市	山本	木象	不平云うのもビジネスの一つなり	岡山県	久戸瀬春光
誘惑に負けずに生きて嫁き遅れ	守口市	樋口	一峯	貧乏が薬と子に云う不甲斐なき	愛媛県	宇佐十四郎
別名も持つてにらみをきかすボス	和泉市	末田	晃康	春の草何も知らずに分譲地	大阪市	山田 蛙水
まとまった金を銀行が喚いでくる	和泉市	井阪東天紅		一年生ランドセルだけ歩くよう	堺市	三宅 ろ亭
年度始め空巢も気分新たななり	大阪市	種谷	敏明	一人前の病人らしく気をまわし	大阪市	古下 俊作
自家用を紙屑が追う二号邸	神戸市	吉田	隆史	おまへんと理由も言わず女勘ね	大阪府	橋本 裕邦
子守して夕飯だけに酒が付き	小松市	月田北海坊		災害地へ愛の荷札もつけ終り	愛媛県	藤原 君子
肌色の筈だ女はもう素足	大阪市	中江ゆたか		改葬をする度人が亦余り	倉敷市	大須賀平々
予備知識過ぎて純潔うたがわれ	笠岡市	谷本鈍愚坊		姑の最大抵抗もの言わず	富田林市	浅川 八郎

略して「」をして太となったそうです。ですから太った馬は使い道がありません。

駄目、開基で双方の境にあって所有のきまらぬ目、何の益にもならぬこと。無駄、仕甲斐のないこと。転じてアカンということだと思えます。駄賃、わずかの礼、駄々子、始末に困る子。韋駄天、よく走る神。韋駄天走り、無茶走り。文字には二つの意味を持つことがあります。劣、はたらく、つかれる等、

高、善。信、仁、優。

下、悪。侵、侮、倒、侮。

人は善悪の友によるといいます。つくりの友達で善悪がきまります。

私の雅号、大然は、

「大」指示。形のないものを手段をもって現わした。大きな事形に現われ人の正面得さる故に人を以てその象（すがた）を示せり。

「自」鼻の本事。自からのことを鼻に私がと指をさします。

「然」夕の中に、を入れた字は肉、犬、火。犬の肉を火にあぶり焼く。火へんは後からつけたもの。

（活字にない文字があり、筆者の意にそわぬ箇所があったように思えます。編集局）

評句 リレー



茶考々 阿夢雄 川木西 山船小 大坂市 敦賀市 糸子市 岡山市 津田麦太楼

ガム噛んでいて自衛隊頼りなし

宵明

阿茶―自衛隊も一種のサラリーマン化した現在ガムを噛もうが、ギターを弾こうが人間として自由だし何の不思議もないけれど、ハガキ一枚で呼び出された忠義の塊みたいな兵隊さんはガムなんか噛んでいなかったし、こんな時代の兵隊さんが頭に入っておるものには確かに何となく頼りない、そぐわない気がする、同感です。

夢考―ガム噛んでいての「いて」は「いるので」と言う意味であるから、此の場合は「ガム噛んでいる」と表現すべきが至当と思う。更に座五の「頼りなし」は内容を解明したことになるので従って余情がなくて何となく、もの足らない、私なら

ガム噛んでいる自衛隊の笑い顔として頼りないという説明を避けるように努める。

雄々―昔の軍隊と、自衛隊の比較が「ガム噛んで」で十分表現されている。軍隊生活の経験をもつ私には特に興味が深い句です。先日通勤車に乗っていたら、若い隊員の一人が帽子を忘れて下車しましたが、やっぱりガムを噛んでいました。戦争には負けたけれども、昔の軍隊ではとても考えられぬ事です。

麦太楼―「ちやにちやガムを噛んでるのを見るところがおぞげがたつほど嫌です、年のせいかもしれませんが、あの頃の進駐軍の兵隊がやたらにガムを噛んでおりましたが、今の日本自衛隊も進駐さんの落し

子であればうなずけます。

予算を仰山費って頼りにならねばならぬ自衛隊のたよりなきを「ガム」で表現したところに川柳らしさはあるのだが、夢考先生の御説の通り余情に乏しいことはいなめない。

阿茶―「ガム噛んでいて」でよいのではないでしようか「頼りない」でも私は「頼りないように思うな」と云うようにとれるのです。あんなのもういざと云う時に役に立つのかいな、とか、沢山税金を費われる事なんかも思い浮べますが夢考先生の句になると何か思いがちがつて来るように思うのですが、御意見をおきかせ下さい。

雄々―夢考氏の添削された「ガム噛んでいる自衛隊の笑い顔」では句が弱くなるように思います。特に下五「笑い顔」では迫力にとほしく、ガムを噛んでいる時は、何時も笑い顔とは限りません。

悪役が死んでおぼはん納得し

一傘

阿茶―悪役もないと芝居にはならぬのだと思いがながら悪が滅びないと承知が出来ぬ生一本と云いますか単純と云いますか、こんな観衆が相当あるものです。悪がききすぎて観客が役者に物を投げたり、舞台へ上ってなぐったと云うような話もつたわってあります。このような生一本と云うか単純と云うか、このよくな人をおぼはんで代表させてあるようで、このおぼはんがとてよく効いておる

ように思うのですが如何でしょう、おかしきもあり軽い穿ちもあるように思われます。

夢考―この句も座五の「納得し」が適切でない。納得とは安心感を言うたのであろうが、いずれにしても下五が表現過剰の為に余韻が全然ないのが遺憾である。

雄々―「納得し」はこれで良いのではなからうか？悪人が世にはばかる事には誰もが憤りを感じるが、家庭では亭主を尻に敷くおぼはんが、悪役が死んで溜飲を下げたので、映画ならさしすめザ・エンドである。

麦太楼―よくまとまった納得のゆく川柳です。芝居でも活動でも、底に勧善懲悪が流れていれば、やはり悪が亡びてめでたしめでたしです。おぼはんも適切です。阿茶―私もこれで一応いいのではないかと思いますが。

雄々―「悪役が死んだので胸がすーとした」という事を「納得し」で表現してあるので、上手に句がまとめであると思います。

孝行の噂へ嫁の来手がなし

清生

阿茶―ピリッとする句だと思えます。おとなしくて親孝行でよく働いてと云えばお嫁さんが飛びついて来そうなんです、来手がなし。とは何と云う皮肉でしよう。この人の句を拝見していても、思ふのがサラリとしていてキョッと急所をつかれるような垢ぬけのした作句でとても好きです。

学びたいと思っています。親ばかり大切に御無理御もつとも親には頭が上らぬ式の孝行では嫁の立場に不満が生じるでしょう。母一人息子一人の場合殊に貴い息子と云うような場合はもう一つ問題が深刻になって敬遠されるでしょう。皮肉な句だと思えます。

夢考―内容を全部言いつくしてある為に余情がなく、何だかもの足らぬ感もあるが、然し例え全部言いつくしてあっても川柳としての味わいがあるので文学の目的は複雑な人生の気持を、よく描出している点、賞讃に値するもの。

雄々―家族の単位が親子より、夫婦に重きを変えた現代生活を突いた句だが「孝行の噂」が少し誇大に過ぎると思う。

肝疾患・疲労・二日酔

★総合強肝剤



リポキュール

(12種の成分を配合)

20錠・50錠・100錠

佐田薬品

妻太楼「孝行ものの息子の母親はチャッカリやで嫁いびりと定めてかかったところに川柳らしい皮肉な狙いがあり、なるほどピリッと来る句です。」

阿茶「孝行の嫁が若し落大とするなら何をもってゆくべきでしょうか、参考のためお教え願えれば結構です。」

雄々「現実の問題として、孝行者の息子に嫁の来手が無いとしたら、親が死ぬまで孝行息子は結婚できないと言うのでしょうか？」

嫁の来手がない場合は「親に孝行しているから……」というよりもその他の問題に関連している方が多い。私はこの事が気にかかります。

こわれてる方の玩具を手放



続・川柳料理暦 (一)

水谷 竹 荘

私が川柳料理暦を本誌に連載したのは昭和二十四年の九月号からである。

あれから十二年の歳月が夢のように流れ去り、料理の世界も変わってきた。サラリーマンのカバンからは弁当箱が姿を消し、飲食店のショーウィンドーには中華料理、フランス料理、ロシア料理、何ん

さす 東 岸

阿茶「大人にも子供にも好き嫌いはありますが大人には理性と欲が付きまとい、子供は単純で好きなものはよくても悪くても好きでつばります。何にもこだわらない所がうらやましい。危険でさえなければ無理にとりあげないようにしてあげて下さい。こわれた玩具で結構楽しんでる子供の顔が浮んで来ます。」

夢考「ただそれだけのもののである、ただ報告の一片に過ぎないものである、句は散文の一片ではない、必ず句として要素を持っていないければならない。」

雄々「親しい人から立派な玩具を買ったので、早速子供に、にぎらせてもすぐ手ばなして、こわれた玩具で喜んでる。貰った玩

具をにぎって笑顔の一つも見せて呉れれば、贈った人も満足して呉れるであらうに……と、皮肉な句だ。生まれて一年位の幼児を連想すると意味が深い。幼児の無心がキョウチされてる。

妻太楼「はいはいの可愛い子供をじっと見守る東岸兄の温顔が彷彿として目に泛びます。単なる報告川柳ではなく、ふかく愛情のしみ出た上乘のものと頂きます。子供の個性はまことに尊いものです、この個性を大いに伸してやって頂きたい。」

阿茶「読みようによって人々に感じとる所がちがうのでしょうかね、実際に見ないと作れない句ではないでしょうか。」

雄々「着想の良さには敬服いたしました。」

前の料理ブームといえよう。

庖丁も持参の料理講習会

勝 三

刺身皿でかいが鯛はただ三切れ

インスタント時代庖丁いりません

竹 荘

テレビ料理

いま大阪地区で五つのチャンネルから、おひる前後の主婦をねらって、似たような料理の時間が出ている。「きょうの料理」NHK、「毎日のお料理」毎日テレビ

「料理手帳」大阪テレビ「料理教室」関西テレビ、「奥様お料理」モ「読売テレビ」がそれぞれである。

はじめに、料理の名と材料、分量が紹介されて講師と助手が、スタジオに特設された調理台で、ものの見事に、「二丁上がり」をやっているわけ、日に五種類のテレビ料理が見られることになった。だがそれを川柳から見ると、テレビはまだ我が家の予算には組めず

クリーニング屋で着かえてゆく若さ 俊 江

阿茶「或る質屋の主人の話、水商売の女の子が洋服の質うけに来て「おっさん一寸此所で着換えさせてや」とバツと外食をぬいたら下はシェミーズだけ、質受けした洋服を着てシャシャと出て行ったのはあきれましたとの事。この句も洋服がワイシャツが知らぬがクリーニング屋で着換え汚れたのをぬいで置いて行くのでしょう、着たきり着スレスレの若い人の生活の一コマをのぞかせて貰ったような気がしますが、句としては名句とは云えないと思いますが年配の人には到底出来ぬ若い人の芸当でしょう。」

夢考「この句は座五に依つて生きている。「若さ」が多少言い過ぎの感もあるが「若さ」が此の句の生命である以上やむを得ないであらう。」

雄々「ワイシャツやカッターシャツを、クリーニング屋で着かえる事は、今まで着ていたものを、すぐクリーニング屋に渡す便利もあり、私の勤務先でも若い人がやっております。下五「若さ」は夢考氏に同感です。」

妻太楼「若い女と見た方が面白い、シェミーズもブラジャーもはね脱いで代りに置いて、颯爽と鼻唄で彼とのデートに出てゆく、この頃のお嬢さん姿が目に見える。」

阿茶「「若さ」に同感です。」

雄々「若いからこういう芸当も出来るでしょう。」

(担当・真鍋一瓢)

秘伝をさがす

プロデューサー

各局の料理プロデューサーは季節感を盛ったもの、目先の変わったもの、ありきたりの材料でも、ちよつとした工夫で味覚をそそるものなどをたえずさがしている。

一流料理やレストランへ下見と講師の交渉をかねて試食にゆけるのは、徳な役得だが、こういうところのベテラン、コックや、調理士何十年という職人気質の人たちの微妙な味加減は、テレビの画像を見ただけではそっくりそのままにできるわけではない。それらの秘伝

みえないものを、片りんをどうひき出すかがプロデューサーの苦心ということになる。

するとところである。

また材料費も一人前、三十円—五十円程度が庶民の家計に望まれるところだが、あまり金額にこだわっていると、おそうざいばかりになって魅力がない。たまには、やれた料理ということになると、短かい時間では説明不足、実際に主婦が作って見たら、目のごちそうにすぎなかったということになる。この時間の制約ということはある。この時間の制約というものは、確かに、テレビ料理をまですくせている原因だという批判は多い。

テレビ料理味はあなたの匙加減

またたとえば、あらかじめ冷しておいた、ダシ汁をここでかけて、などといわれてもその要領がわからない。きめてはまずいから、すばやく、うつわに入れて、などいわれても普通の家庭の台所では設備もスタジオのように最新式にはゆかないし、まして横から次、次と必要の器具や材料を準備してくれる助手なんかいない。まだその上に足手まどいの子供が、じゃまをして思うように運ばないのが現実だ。こうした実生活とのミソをうずめるのは、なんといつても講師の説得力ということになる。

食堂居間兼寝室へテレビ据え

テレビ買うてやっぱ三本立に行き
左文字
堅持
ところがこの講師は二通りのタイプがある。料理学校出の先生は実に親切でいねいに説明して教え方もうまいが、できた料理が概し

て規格型であまりうまくない。もう一つのタイプは調理士、コックなど実地をふんだにベテランだが、確かに作ったものはうまいが、口下手でひとりよがりになり、主婦がまねても、その通りに出来ないきらいがある。

その上簡易時代というか全般を楽しむ時代とあつては、テレビ料理よりもインスタント食品やカン詰料理が流行するのも無理はない。

インスタント料理ばかりの共稼ぎ

ラーメンと缶詰置いて妻出掛け

インスタント料理で娘嫁く

食卓はインスタントで寂し過ぎ

インスタントのれんの味に歯がただず

初夏の食べ物

魚の王様鯛料理

鯛買って帰れば妻を驚かせ

到来の鯛を家内はもてあまし

朗報へ玄関から来る鯛の色

魚の王様といわれるのは、まず形がいい、山でいえば富士山、すつきりとバランスのとれた姿は比類がない。赤い色はご祝儀ものとして最適である。名前が「メダタイ」に通じるだけでもあるまい。ふつうの魚の寿命が一年から五年、長くて十年というのに、鯛は

三十年から四十年の長命である。そして料理の味がいうえに、刺身はもちろん、焼いてよし、煮てよし、酢にしても、鍋に入れても、どんな調理法でもOKである。

さて、このま鯛、産地によって、味が上下する。昔は前の魚と違って西宮のエビスさんの前とどれたのが極上のものであった。今では明石鯛といわれる。明石もの、紀州もの、つづいて内海を西に下った尾道もの、そして九州の天草、五島列島付近のものというのが相場、外海のもの、とくに外国から運んでくる冷凍のものになると、ぐんと質が落ち値段も四分の一から五分の一に下がる。大阪から西へ行くほど大味、つまり味がふやける。駿河湾などでとれる東のもの、もちろんダメ、だから東京の一流料亭では明石鯛を空輪させているほどである。

竜宮で育ったような鯛の色

そり鯛を屏風でかこむはずかしさ

魚島

ウオジマ(魚島)というのは五月のはじめごろ、外海のマ鯛は東は紀淡、鳴戸両海峡、西は豊後水道を渡って大阪湾や浅瀬に集まってくる。適当な産卵場をみつけたメスの群れが、モ(藻)や海草へタマゴを産みつけると、オスの群れがそれを追かけてくる重なりあ

い、群れがあらった鯛の背中が浅瀬の上まではみ出る。まるで鯛の

群れが島のようにみえるというわけである。

産卵前はオスもメスもいちばん脂がつてうまいが、産卵がすむと、どちらもうたがいてしまつてまづくなる。面白いような事実である。大正の初めごろまでは、船場を中心に「ウオジマのタイ」を贈る習慣であつた。黒いゆすの帯を立矢字(たてやのじ)に結び高まげ島田に素足姿の女中さんたちが、ササの上に鯛をのせて分家から本家へ、あるいはお得意さんへ運んだものである。東京地方の初ガツオ同様で、「ウオジマ」に鯛を食わぬはクチだといわれたのもこのころのことである。

大鯛へ港の朝のかがやかし

鯛網へかかった鯛捨てられ

裏口の鯛へ女中も慣れてい

しかし近頃は鯛の入荷はへる一方、高級料亭に買取られて、一般の人の口には入らない。そのうえに値段も高くなるばかりである。名実ともに魚の王様ではある。

鯛の値に今更祝い延ばされ

ず

よるこびの鯛は値切らず買

うて行き

(次身は真夏の味覚へ続く)

大阪弁

酒井ひか平

コーヒの味

モダン 川柳

心斎橋大丸北の辻東へ

御門

TEL 27 6684

御集会には随上御利用下さい



やわらかいアクセント、大阪弁は商人の言葉である。大阪と云う土壌の上に培われた特殊な言葉は、やがては標準語に同化されるものであろうが、それにしても昨今のマスコミにハンラシる大阪弁は、時として、無茶苦茶でゴザリますがなど云いたくなる。

藤沢恒夫さんの大阪弁は島の内匂いがすると云われ、宇井無愁さんの文学には船場の言葉が綴られて居ると云う。武田鱗太郎さんにも味のある言葉が記されているが、当節売れっ子の山崎さんの大阪弁の内にあるものは鮫辺りの言葉であらうか。何れにしても、船場島の内鮫辺りの商家が焼けてしまつては、過去の言葉であるかも知れぬ、しかし、大切に末永く伝えて欲しいと思う。川柳に、大いに、いい句を残して貰いたい。



雨

今年の日本はカラ梅雨という予報でした。理由は中高生々庵氏が近く外遊されるからだそうです。イヤこれは冗談ですが、氏と雨の関係を綴ってもらいました。

中島生々庵

中学時代から雨男で通り、大学時代暑中休暇になっても、まだ雨が降らぬから帰っては来ないよと家族からまで噂された程の男である。

川柳をやりかけてからも、雨と云えば生々庵、生々庵と云えば雨。まるで山鹿流討入りの合言葉のように云いはやされて終った。今日では多少薄らいで来ても居るし、生々庵自身なるべくこの仮説を打ち消すべく努力して来て居る。そこへ突然編集部から雨の随筆を書けとの指令が出た。如何に雨男と云い乍ら断じて雨降りが好きではない。大雨、秋雨、雨もりは勿論の事、たとえ春雨でもぬれて行こう等とはもっての外である。それに生来の無精もので傘を持って歩くのが大嫌いである。この大嫌いだから雨の方から追いかけて

来るのではなからうか。丁度犬の嫌いな者がよく吠えつかれ、猫の嫌いな膝の上によく猫が上って来る。猫の足裏のつめたさは寒気がする程猫嫌いには身にしみる。悪女の深なさけの類である。それを世間の人達は伊達や酔興で雨を呼んで楽しむかのように云いはやす人が居るが、もっての外の見当違いで実は私が出席したり、司会をしたりするために雨が降るような事があってはと一カ月前から気を病んで居るのが真実である。人の気を知らないで、顔を見るともうそろそろ降る頃だとか、やっぱり降って来たなとか、ほんとに身を切られる思いである。それにしても路郎先生の天気男も有名で少々降って居ても傘なしでまかり通られる事が多い。迷信だとかかり笑っても居られぬ位の中する

し、路郎先生と同居すると晴曇相半する事さえ稀れてはない。ところで世の中に及ぼす雨の影響であるが、上は大雨のために堤防が切れて大水害になったり、下はニコヨンさん達を失職に苦しめたりする事もしばしば見られる事であるし、河川を修める事が国を治める基だとさえ昔から云われて来て居る位に厄介なものである。然し一滴の雨が二カ月前も三カ月前も降らないとすると農民は勿論一般人民が塗炭の苦しみを味い、果ては水喧嘩とまで展がる大騒動が現出するのも亦歴史や伝説に多く聞くところである。どちらかと云えば庶民の苦しみは水饑饉の方が深刻であるように思われる。昔から雨の降るのを止めて呉れという祈願は少ないが雨乞いの祈祷や、行事は各地方に雨乞唄、雨乞踊とし

て必ずと云うていい程あるのがその証拠であり、且つその雨乞いの靈驗あらたかな神仏や行者も相当あるのかも知られる。

世の中で知られて居るのはかの「雨僧正」である。今から千年ばかり前和泉の国に生まれて名は仁海と云う。九歳の時高野山に上り、後山城小野に曼荼羅寺を建立し、東大寺別当に補せられ、僧正に進み九十二歳で亡くなったのである。しばしば祈雨に靈驗を示したのでこの名がある。

「雨僧正」と並び称せられるのは「雨法印」である。諱は性海。雨僧正よりずっと後の今から三百年程前の人で大和長谷寺第二十五世である。度々請によって雨を祈り効驗ありしために「雨法印」と呼ばれる。

雨の神も、風の神と共に各地方にあるが、大和国宇陀郡の室生竜光神社、丹生川上雨師神社、山城国貴布祢神社は共に甘雨を降らし霖雨を止める靈驗顯著を以て知られて居る。生々庵も今少し高德聖賢であれば、全国津々浦々に請われて雨乞い川柳でも作り、小野小町が作った雨乞唄の向うをはって地方行脚に出掛けたら「生々庵僧正」とでも後世の人が祠つて呉れるかも知れぬものを鐘二つでは残念な事である。

一口に雨と云っても種類や区別がおびただしく、五風十雨と云う

言葉もあるようにその按配適切な結果は年穀の豊凶に係影響して来ること甚大と云うわけである。季節的に雨を別けて見ると、春雨、夏雨、秋雨、五月雨、梅雨、夕立、白露、青雨、時雨と云うのがあり、雨の降り方の性質から別けると地雨、霖雨、村雨、驟雨があり、強弱と云う点から云うと微雨、強雨、豪雨、暴風雨となり、一般動植物に対する恩恵から云うと慈雨、波雨と呼ばれるのがあ

る。前おきはこの位にして川柳の方向にパンをむける。さすが長年雨に心惹かれて日暮らして居るの雨の句には何となく近親感が禁じ得ない。たとえば句集を開いてもすぐ雨と云う字にチェックする傾向がある。いい癖か悪い癖かは別問題であるが、こんどのように突然雨の随筆でも頼まれた時には助かると云うものである。私の手近かにある句集の代表としては「旅人」「福寿草」「私達」であるが、「旅人」には七句、「福寿草」には十五句、「私達」に二十四句チェックしてある。こんな機会にこのチェックの句だけを拾い読みして見るのも友達方より来るの感じである。まことに申訳ない事ではあるが「旅人」や「福寿草」の句を全部空んじて居るわけではなく、今更らのように愉しさを新にする句が沢山ある。先ず「旅

人」に

天皇へ雨も埃りの

たたぬほど

彼の一生雨雨の

まだまだった

この二句は忘れないで何時でも空
んじて読める句である。こんど読
み返して居る内に

雨風が逢いたいところつの
らせる

と云う句が二五四頁にあるのを発
見して、干からびた私の心臓が一
寸きりとざわめく。こんな雨も
あるよと誰かがささやいて呉れ
た気がした。難解の句としてよく
質問されるのは六九五頁の

時雨れてる銀座に亀屋鶴五
郎

である。解釈を教えられては忘
れ、教えられては忘れ又忘れて居
る。

「福寿草」の中で私が一番好きな
のは一三七頁の

鉄瓶をおろして雨の

音と知る

である。機会があったら是非短冊
に書いて頂きたいとそれをねらっ
て居る句である。

次に忘れられぬ句は一九二頁の
鹿もまだ知らぬ小雨が降り
出した

である。奈良に行つて雨に会った
びに思い出す。静かな奈良の風景
が描き出されて余すところない。
これと見たりがなく弟たりがたい

のは四七頁の

夕立が晴れてお寺の

冷やっこ

一寸追従を許さぬ名句と常に師事
して居る。すらすらと一行書
きに走り書きして山寺の奥まった
茶室でも掛けてあつたらどうだろ
う。瞬間電撃のようなショックを
受けるだろう。それかと思うと八
五頁には

時雨れたら松の木も
ある庭雀

と云う良寛のようにわびしい生活
の句がある。こうした境地にも努
力して入ってゆきたいとの念願は
あるが、なかなか道遠しである。

「旅人」で逢いたいところつの
せるの句と同じようにこんど殆ど
初めて拝見するような気持ちで打
たれたのは一二頁の

夕立は小気味よし君が
叱咤も

である。何時頃のお作か、何れ相
当昔のものと思うが、今日までど
うして私の頭の中に残つて居なか
ったのか不思議な位に打たれた句
である。之れも是非短冊に書いて
頂きたいと思う句である。

句集「私達」に移る。二十四句
の中から赤鉛筆のチェック五句列
記して見る事にする。

雨の街舞妓に道をよけてや
り

(高志)

春雨へ女房と濡るあほらし
さ (好郎)

雨の宿山を眺めるばかり也

(緑雨)

雨降れば降るとて二階仲が

よし

春雨も乙なものが屋根が

漏り

(潮花)

(万古)

因に「私達」に集録された作句者
のお名前に「雨」と号せられて居
る方は緑雨、山雨楼のお二人だけ
である。緑雨氏は健在健吟なれど
山雨楼氏今やなし。いささか雨の
ために寂し。

續

川柳書架

(9)

句集

福寿草

(麻生葭乃著)

★巻頭の麻生路郎氏の序の書き出
しに、

「明治末葉の女性川柳家で今日ま
で続いているのは僕の記憶では葭
乃ぐらいなものである。葭乃にし
ても僕と結婚していなかったら遠
うの昔にやめていたのに違いな
い。」と述べている。それほど古
い柳屋の作家だ。

★その「あとがき」に「私の句が
個人句集として刊行されようとは
夢にも思っていなかった」と書か

れているほどの無関心でありなが
ら不朽洞会の人々によって句集刊
行会が生まれ、秀れた句集として
世に出たものである。

★昭和三十年七月一日発行。定価
二百五十円。菊半蔵二一四頁。葭
乃句集刊行会発行、発行所大阪府
住吉区万代西五丁目二五番地川柳
雑誌社。

★著者は麻生路郎氏夫人。女性川
柳家として第一人者。

ほんとうの私

(三条東洋樹著)

★「あとがき」の一節を抜くと、
「柳多留の川柳は、前句附の拘束
から離れ附句の意味が一句として
独り立ち出来る事によって生まれ
た。文芸としての現代川柳は、課
題によって縦横に作る熟練さより
も、自己を打ち出す雄詠精神の濃
淡が問題にされるべきだと思ふ。

従つて私と云う未熟な人間が創つ
た川柳が、歎き、考え、おののき
或いは又感謝し、溜息をつく等
の、未完成な、あわれむべき人間
記録であつても、それは致し方の
無い事だと思つてゐる」と述べら
れてゐる。

★昭和三十三年六月十日発行。定
価二百円。一二四頁。著作兼発行
人三条東洋樹、発行所神戸市兵庫
区神田町七九白鳥川柳会。

★著者はふあうすと雄詠漢者とし
て名がある。

川柳をぐるま

(濱 夢助著)

★巻頭に白石維想楼、前田蜜郎両
氏の序と目序がある。

★目次を挙げると、○皇太子誕
生、生意気さかり、○深い雪、川
柳独語、○歸、仙台の三馬鹿、○夏
羽織、やぶ入り、○盆燈籠、春雨
傘、○雑役夫、篤農、○ランドセ
心、花環、○晴着、炬燵、○窓の
春、浮世風呂、○ふた親、秋灯対
談、○母の座。

(註、○印は作品への題名、後同)

★昭和三十三年三月二十五日発
行。定価三〇〇円。B6版一七七
頁。著者濱夢助、編集後藤閑人、
浜澤舟、発行所、仙台市小田原果
丁五、川柳宮城野社。

★著者は川柳宮城野社を主宰した
東北の重鎮。
本書刊行後、十月三十日に物故
された。

胃潰瘍を

内服でなおす

潰瘍の創面に直接働い
てニツシエに肉芽を盛
り新しい粘膜を新生さ
せ且つ副作用は全然な
く胃腸を迅速に和らげ
ます。一回四錠ずつ一
日三〜六回使用致しま
す。

メサフリン

錠 一〇〇錠

五〇錠

七〇〇錠

五八〇〇錠

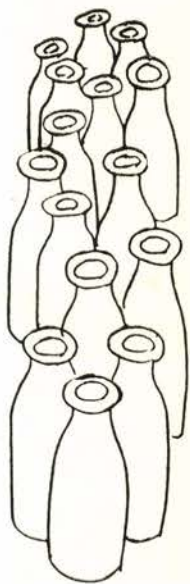
エーザイ株式会社

川柳に

おける

大阪辯

北川春巢



近の雑誌や句集を調べて見たが、それはど多くはなかったのである。

川柳は我々の日常しゃべっている言葉の通りに、五七五と作ればよいのだから、大阪弁を使った句ももう少し数が多いだろう、と期待していたのであるが、それが案外に少ないのである。これは一体何に原因するのであるか。

第一に考えられることは、大阪弁ブームにも拘らず、川柳人で日常大阪弁を使って話している人が比較的少ないのではないかと、いうことである。我々大阪に住む者は、標準語ばかりで暮しているわけではないが、少し改った物云いをする時には、大阪弁はひっこんでしまふのである。

次に、前田氏は大阪弁の特徴として、その冗漫的であることと、迂回的であることを指摘された。これは市民川柳大会の講演の時に、大阪弁の「非能率性」という言葉で云っておられた。標準語で一字ですむ助詞が、大阪弁では二字、標準語で二字の助詞が、大阪弁では三字、四字と必要なのである。

よつて
さかい。

このことは、大阪弁の喜劇性というか、とぼけたような味と関係があるのだが、また五七五と字数の制限されている川柳にとっては、重大なことである。同じことを表現するのに、大切な字数を無駄使いしなければならぬ大阪弁では、作句しにくいというのが第二の原因ではなからうか。情景描写の句はともかく、理性に訴える穿ちの句においては、大阪弁を使うのが標準語を使おうが、その印象には大した違いはないのであるから……。

字数の制限を云わない小説などにあっても、会話は大阪弁であるが、説明の所、いわゆる地の文は標準語というのが圧倒的に多い。「女の勲章」を書いた山崎豊子氏も銀四郎の大阪弁が取引には有効であった、と自認しながらも「ラブシーンと心理の独白には大阪弁の弱さを感じる、これは標準語でなければならぬ」と云っている。「思想の科学」三十六年三月号）それに反して会話の部分、川柳においてはしゃべる言葉の部分は、大阪弁を使うことによって、その場のフンイキや人物の性格を巧みに現わすことができ、標準語に期待できぬ効果を挙げることが

近頃は何でもブームばかりで、大阪弁ブームもその一つである。テレビ・ブームの副産物の一つであらうが、その他ラジオ・芸能・マスコミ等の力もあずかっているだろう。昨秋大阪市民川柳大会の席で、「大阪弁の喜劇性」と題して講演された前田勇氏が、大阪弁の研究で「なにわ賞」を受けられたのが一九五七年であったから、その頃からブームが起ったと見てよいかも知れない。ただしその前年には、大阪ことばの会から「大阪方言事典」が發刊されている。最近の前記前田氏著の「大阪弁入門」が朝日新聞社から出版された。大阪弁ブームも最高潮に達したと見てよいと思う。前田氏が受賞された研究がどんなものである

かは、読んでいないので知る由もないが、「大阪弁入門」の方は、我々によくわかるように書かれている。入門という書題にふさわしいと思うのである。前田氏によれば江戸側の文獻に大阪詞(ことば)という語が見えるのは、安永期(一七七〇頃)だとのこと、大して古いことは云えない。西鶴(一六八〇—一七〇〇頃)や近松(一七〇〇—一七二〇頃)あたりの作品にも大阪弁は見られるが、それらは現代とはかなり違った印象を受けるのである。現代では船場の言葉が大阪弁のモデルだと云われていたのが、それも明治大正昭和と次第に変化して来ている由である。

所で、川柳における大阪弁はどうなっているであろうか。川柳が庶民の文芸であると云われるから

には、川柳は誰が読んでもわかる言葉で詠まれていなければならない。他郷人の読者が読んでわからない大阪弁の句であってはならない。方言には他郷人に意味の通じない言葉が少なくないのである。敢えて方言を使つて詠まれた句は、その方言でなければ現わせない味を持つていなければならない。私は思う。方言を使ったがために、その句が生きて来たと思われる所がなければならぬ。

「買えはいじやないか
買うたらええやないか
暑いから。上衣をぬごう
暑いさかい。上衣をぬごう」

可能なのである。

二

中風だんね と奥にほつと
かれ 路郎
よう降りまんア と老妻
にねざらわれ 路郎
間違いなやと宿題母にさし
花村
恋人がいるのに嫁けへんか
ひさみ
あきまへんやろかと借金
が弱し 淡舟
お燈明バーのマッチで悪
ました 多久志
腕時計動かなくてもいいの
んよ 豆秋
商売のうまいやつちやと見
下げられ 保美
細長うやってまんねとまだ
かつぎ ひか平
右はしゃべり言葉に大阪弁を使っ
てある句の例である。「中風だん
ね」「よう降りまんア」「間違
いなや」「嫁けへんか嫁けへん
か」「あきまへんやろか」「バ
アのマッチで悪うました」「動かな
くてもいいのんよ」「商売のうま
いやつちや」「細長うやってまん
ね」などが何れも大阪弁で、実
にしゃべっている言葉のままであ
る。そして地の文で、誰が誰に、
どんな場合に云ったのか説明して
ある。そして大阪弁でしゃべらせ

ることによって、標準語では云い
現わせないフンイキが出てくるこ
とも見逃せない。

しかし、これらの大阪弁は、発
音に独特のイントネーションやア
クセントがあることも知っておく
必要がある。読む時にはそれに従
って読まなければならぬ。大阪
弁のアクセントやイントネーショ
ンは、ラジオやテレビでおなじみ
だと思いが、標準語とは多少違っ
ている。例えば、

母娘してぼちぼちしとく大
掃除 水客
名取りぼつぼつ。独身主義が
いやになり 潮花

これはしゃべり言葉の例ではない
が、「ぼちぼち」が大阪弁、「ぼ
つぼつ」が標準語である。そして
「ぼちぼち」は後の方の「ぼ」に
アクセントがあり、「ぼつぼつ」
は前の「ぼ」にアクセントがあ
る。所が標準語の「ぼつぼつ」も
後の「ぼ」にアクセントを持って
来たり、または前の「つ」にアク
セントを移すと大阪弁に仲間入り
することができるのである。標準
語を大阪へ持ってきて、アクセ
ントの位置を変えた、という言葉も
多いのである。

三

で。ぼ。ち。ん。へ。蠅。は。わ。ざ。わ。ざ。米。
て。と。ま。り 豆秋

警官の笛へおっ。さん。つんぼ
なり 豆秋
し。や。う。む。な。い。香。具。師。を。半。日
見。て。し。ま。い 霞乃
ご。り。が。ん。で。あ。ろ。と。あ。い。つ。は
持っている 路生
あ。ま。え。た。の。背。に。も。い。い。よ
ランドセル 没食子
べん。ち。や。ら。の。代。り。に。お。辞。儀
ばかりする 夏六
ボ。ロ。ク。ソ。の。批。評。最。中。ホ。ー。ム
ラン 光輪
悪。阻。の。背。撫。で。て。あ。ん。じ。ょ。敷
かれとり 幽谷
や。や。こ。し。い。店。で。は。ビ。ー。ル。飲
んでおき 静馬
御。清。潔。で。い。ら。っ。し。や。い。ま。す
わ。と。お。ち。よ。く。ら。れ 七面山
以上は、句の中へ大阪の方言を入
れてある例である。

「で。ぼ。ち。ん」が大阪弁で、「おで
こ」のことである。「で。こ。ち。ん」
ともいうが、おでこというより
は、はるかに川柳的だと思う。
「おっ。さん」は「おじさん」のつ
ま。つ。た。語。で。あ。る。が、他。人。の。場。合。で
も年上の男の人に対してよく使う
言葉である。「買物ブギッギ」に
「おっ。さん、おっ。さん、これなん
ぼ？」と一時よく歌われたから、
この語のアクセントも全国の人々
の耳に親しいと思う。所が「おっ。
さん」と「さん」を低く発音する
と「和尚さん」という意味になる。

スマートで
着心地良い



GOLDEN
O.S.K.
紳士服

各地特約店に有り

「はろくそ」に云うは、「くそみ
そ」に云うことである。「た易い
ことだ」という「はろくそ」もあ
る。

「あんじよ」は「あんじよう」を
つめて発音したもので、大阪弁で
はつめていうのが、一つの特徴に
なっている。市電に乗っていても
「〇〇町一丁目」という所を、
「〇〇チヨ一丁目」と車掌がアナ
ウンスする。他郷の人は耳ざわり
であろうと思う。

如才なく子猫ももろて帰る
なり 紫香

この「もろて」を「貰うて」、標

準語では「貰って」というべき所で、ここでは「音字減っているの」で、川柳の表現には都合がよい。

所で「あんじょう」にも色々の意味があるが、この場合は「うまく」「体裁よく」などと標準語に云い変えることができる。しかし、何と云い変えても「あんじょう」の感じは出て来そうにはないのである。

ろう。「ややこしい男や」と云えば、「本心のはっきりせぬ、つかまえ所のない男」というのはどの意味になる。

「おちよくられ」の句は、これまでの例と違って、地の文を大阪弁にしてある。「おちよくる」は、「からかう」「馬鹿にする」という意味であるが、作者が馬鹿にされた、といって怒っているのではないことが、大阪弁の「おちよくられ」に出ているのである。

作ったものか、他郷人が聞いて耳新しい語を横綱にしたのか、はたまた頼用度の順にしたのか、そのへんの所は知らないが、ともかくこれらの大阪弁を標準語に直してみても、実感の出ないことは、これまで例句について見た通りである。

もう一つ大阪弁には、目、手、歯、胃、毛等々一字音の名詞を長呼してメー、デー、ハー、等と二音に云う特徴がある。川柳の五、七、五音の所へこれらの語がはいると、大阪弁で詠めば五七五になっているのだが、普通に読んでみると一音足りない。いかにも間抜けに思える。口調が悪くなることは、句にとって大きなマイナスである。表記法を考えてやれば、これは救われるかも知れぬが、一般にこの云い方は、上品な大阪弁に属するとは思われない。この種の例句が見当らなかったのも当然だという気もする。

四

以上を結論的に云うならば、今日の大阪弁ブームにも拘らず、大阪弁を使った川柳は案外に多くないということである。少ないながらも、集めてみた句を分類すれば、大阪弁の会話をいれた句と、名詞その他に大阪の方言をいれた句とに分けられる。大阪の方言の方は、方言辞典でも調べれば、

その句の大意はつかめるであろうが、それを標準語に直してみた所で、大阪弁で詠んだ味はとも出ないのである。

二十数年も前のことであるが、東京の学校へ行った友人から、大阪弁を漫才のようだと、いつて笑われたという話を聞いた。これは大阪弁そのものが、東京人にとってオモロイのである。大阪弁に「喜劇性」があるのだ。その大阪弁を使って、大阪弁の喜劇性によって川柳に滑稽味を与えようとするのは、川柳の邪道だと思ふ。川柳に大阪弁を使うのは自由勝手である、がそれはあくまでオマケツクスな意味で使うべきものと思うのである。

現代柳人録

- (一) 姓名 (二) 雅号 (三) 別号
- (四) 現住所 (五) 生年月日 (六) 出生地 (七) 職業 (八) 電話 (九) 自信の句一句 (一〇) 川柳以外の趣味 (一一) 配偶者の有無 (一二) 川柳に手を染めた年月
- (68) 石川 侃 流洞
- (一) いしかわ 侃 (二) 侃流洞 (三) 石川 侃 (四) 山口県下関市東向山町八五 (五) 大正六年八月二十一日 (六) 山口県豊浦郡豊北町大字神玉 (七) 国鉄職員 (八) 下関駅下関三三二一内線 (九) 大工さん持ては素直な鋸であり (一〇) 釣・謡曲 (一一) 有 (一二) 昭和五年三月

(69) 白井 花 戦

- (一) 白井 正人 (二) 花戦 (三) 白井 正人 (四) 東京都杉並区大宮前六丁目四二七 (五) 明治四十二年八月二十四日 (六) 函館市音羽町 (七) 銀行員 (八) 荻窪三三四三七 (九) 相談むかしは櫓の上で泣き (一〇) なし (一一) 有・妻涼花 (一二) 昭和七年八月

(70) 八木 摩 天 郎

- (一) 八木 均 (二) 摩天郎 (三) 美夜路 (四) 堺市九間町東二丁目九番地 (五) 明治三十五年三月四日生 (六) 現住所に同じ (七) 会社役員 (八) 堺三三七五 (九) 税吏来て猫にさかなを食われたり (一〇) 書画・骨董・読書 (一一) 有 (一二) 昭和五年十月

(71) 鈴木 ま こと

- (一) 鈴木 誠之 (二) まこと (三) 芋仙 (四) 岐阜市外那加町雄飛丘二丁目十九 (五) 明治二十六年七月八日生 (六) 岐阜市南長森草島 (七) 職員 (八) はなし (九) 積善の家にそうした額 (一〇) 絵画・演劇・映画 (一一) 有 (一二) 明治四十二年

(72) 正木 十 千 棒

- (一) 正木 徳三郎 (二) 十千棒 (三) 靈芳 (四) 東京都墨田区向島一六 (五) 明治十七年十二月二十八日生 (六) 東京都本所区相生町五の六 (七) 美術工芸 (八) 有 (九) 真直に歩けば人につきあたり (一〇) 書画・骨董其外多方面 (一一) 有 (一二) 明治四十三年頃

う。「ややこしい店」と云えば、立派な料理屋ではなく、「一ぜんめし屋」とか、うす汚い「うどん屋兼業の飲み屋」のような店であ

方		東		蒙		方	
横綱	褒めがいがしんたれ	前頭	褒めがいがしんたれ	御免	大阪弁	横綱	褒めがいがしんたれ
大関	褒めがいがしんたれ	前頭	褒めがいがしんたれ	行司	すんまへん	大関	褒めがいがしんたれ
関脇	褒めがいがしんたれ	前頭	褒めがいがしんたれ	おおきに	おおきに	関脇	褒めがいがしんたれ
小結	褒めがいがしんたれ	前頭	褒めがいがしんたれ			小結	褒めがいがしんたれ
前頭	褒めがいがしんたれ	前頭	褒めがいがしんたれ			前頭	褒めがいがしんたれ

右は先達で大方川柳会の十周年記念大会の際に頂いた手拭の大阪弁の一部である。これの横綱とか大関とかのランキングはどうして



大日お竹

富士野鞍馬

関東で下女上方ではけいせい

(タル二四)

上方で傾城というのは、普賢菩薩が江口の遊君に化身したことで、関東で下女というのは、大日如來の化身、下女お竹というのである。それ

また、

普賢は遊女大日は下女と化け

と具体的に詠まれている。

江戸大伝馬町の間屋、佐久間平八（善八とも勘解由とも伝えられる）の家の下女お竹は、大日如來の化身であったという伝説がある。

いい下女を置たと内儀凡夫也

(傍 五)

仏とも知らず一兩二分でおき

(タル二八)

佐久間では、それとも知らずお竹を雇ったのであった。

一兩二分は、江戸時代、下女

とあるので、それがまた川柳に詠まれている。

お竹が来たので此頃の大のやせ
(タル七九)

お竹来て佐久間の犬は首陽山
(タル一六二)

間輩のお松は飯をいっそ捨て
(タル一八)

お竹めは無慈悲なやつと大仲間
(タル一五四)

お竹眼病間違で鼻の種
(タル九八)

と、犬にやる残飯もないように、一粒の飯粒も大切にしたのであった。

済度のうちで大日は木綿物
(タル二六)

大日はもめん普賢はひぢりめ
(タル六七)

普賢菩薩の化身妙女は、遊女であったから緋縮緬の湯文字であったが、お竹は下女だから普通町の女と同じ、晒木綿のオコシであっただろう。

そしてこの大日如來のお竹も、凡夫にはそれとわからないから、口説かれたり、いたづらをされたりしたのであらうと、川柳は、いろいろに想像して作っている。

知らぬが仏がおむわなお竹どん
(タル三三)

大日如來の尻を水くみつめり

(傍 初)

お竹どんどうだと凡夫尻をぶち
(タル一五、拾三)

お竹が尻をたたいたらくわんと鳴り
(タル六二)

お竹どのどうだと凡夫つめるなり
(タル五八)

お竹どんなすと凡夫がたわむれる
(タル八一)

ながしのわきで大日をくどいてる
(拾 三)

しらぬこととて大日ははって行き
(タル二八)

後生だとかどかれお竹こまる也
(タル二八)

もちろん口説かれても応じなかつた、

させそうでさせない下女はお竹なり
(末 二)

しかれども豆の報酬はお竹せず
(タル八六)

股倉の報酬ばかりはお竹せず
(タル三一)

のちに穴なし有り伝馬町の下女
(タル二二)

昔、小野小町は穴なしといわれていたが、この大日お竹も、そういわれたかも知れないとがっている。それで

お竹どんおがむからとは口説きあて
(タル三六)

という句もある。

「お竹大日縁起」に

「死してそのまま、羽州湯殿山森に、金色の光り一度にあらはして、竹は、中尊婆娑婆にて、主なりし佐久間夫婦は、両脇立と成りて今に有り。」

とあり、湯殿山というのは、羽黒、月山とともに羽前三山と称えられている。

お竹在所へ紫の雲で行き
(タル三六)

古里へ紫雲お竹の宿下り
(タル一五二)

敷入、宿下りには、紫雲に乗って、極楽浄土へ帰ったであらう。

そして、佐久間家に勤めあげて、本来の大日如來にかえって消え失せた。

大騒ぎ下女が仏に成りまし
(タル一三三)

た
(タル一三三)

光明赫としてお竹どんとか行き
(タル一三三)

と詠まれている。

また、そういう有難い下女だったから、佐久間家にもしお竹の請状が残っていたら、宝物になったであらうと、

一の宝物はお竹のうけ状
(タル三〇)

と川柳に作られている。

なお、お竹が使ったという流しが、昔の心光院に納まつて、宝物になっている。

絵と川柳で表現する歴史

(第15回)

戸田古方

(28) 古代社会と封建社会

古代社会とは平安以来の京都の公家の社会であり、武家社会とは今、新しく東国鎌倉に生まれた武家の社会であります。この国はその二つの異った社会の入れかわりを説明したものであります。

鎌倉時代は古代社会から封建社会にかわります。封建制度は遠例鎌倉幕府開府を以てはじまり江戸時代に終るのでありますが、明治、大正、昭和、敗戦後の今日にも封建的なものをたくさん残しているように、奈良時代、平安時代を通じて私地即

ち、発達してまた荘園も封建の母胎であったと見られないことはありません。鎌倉以後の封建社会も亦二つに分けられています。すなわち、鎌倉と室町の二つの時代は前期封建制とよばれ、封建らしい封建の時代でもありました。この時代は分権的封建制ともいわれるように、中心の力はあまり強くなく、それに対して、後期封建制といわれる時代であります。鎌倉時代はこの

江戸時代は西洋の王による中央集権、即ち、絶対王制にも似た集権的色あいが強くあらわれはじめています。そこで集権的封建制とよばれているのです。ここに描きましたのは、その前期の封建のすがたでありまして、武家社会の外に、封建社会に対立する古代社会、すなわち、京都の公家社会が相当の力を残していた時代であります。



對抗勢力のおかげで、武士達は強い団結をすることが出来、その力があつて、公家の力に喰いついていたのであります。武家の世界に生まれた、大小の黒い丸は御家人とよばれる、幕府と生死をともにする人たちでありまして、恐れ気もなく、勇敢に公家社会に飛びこんでいており

はじめ、天下を定

断食で闘った糖尿病



吉田圭井堂

もう二年にもなりますので私が糖尿病と闘った断食療法を皆さんに申上げ、御参考にして頂きます。私は決して私がやって効果があつたから、皆さんも是非おやり下さいとお勧めする為、この話を持出したのでないことを前以てお断りしておきます。

私は一昨年五月頃から急に疲労

が甚だしく食欲もなく頻りに尿は出る、口は渇く、睡眠がとれぬので医師の診断を求めた所、一度尿の検査をしてみようかと調べてもらった。実にひどい糖尿病である事が判りました。治療法を聞けば病状に於いて、規則正しい食餌療法と毎日インシュリンの注射とDハ六〇の内服薬を用いるのだが、仲々自宅では血糖の検査も十分出来

ぬから、早速入院の必要があることとで、その夜近親者が集まって、種々協議中入院説と断食療養説とで纏らず、結局断食療養へ行つて断食が糖尿に効果があるか又前例や実績を確認することにしました。

ソコでその説明を一寸受け売りしますと、糖尿病とは、肝臓から出る胆汁と協力して食物を消化する酵素とインシュリンと云う体内に貯蔵の葡萄糖を分解調節するホルモンを、分泌しているこの臓器が病気に、糖質の代謝調節が乱れて、血液中の葡萄糖がグリコーゲンに変化が出来る、その糖分が全部尿と共に排泄する、つまり臓器が病気にしてインシュリンのホルモンが出なくなつて起る病気で、現代世界の医学界で行なっている食餌療法は目的は臓器ホルモンの役目である食料要素の新陳代謝を、制限して米等を摂らず、臓器を休ませて病気を治すのである。

臓器はインシュリンホルモンを分泌する外、糖液と言う消化液も出している、全部の休業にはならぬ。断食をすると消化器関係は全部休むから臓器から消化液も出さなくて済む、又断食をすると内臓を支配する交感神経が非常な勢いで活躍を始めるので、胃腸は勿論肝臓もその治療機関が働き出す、消化器病は皆一斉に治るのである。又断食をするとこの病気

めるという理由によって、勅許をえた、守護ならびに地頭こそは、この公家攻勢の有力な武器であったのであります。公家の私有地荘園はこの守護、地頭によってこれからだんだん切崩されてゆきます。公家も室町時代まで、それでも自分の勢力を守ろうと努力します。

しかし、室町

時代になると、全く駄目になってしまします。しかし駄目になって、公家が全く日本歴史から姿を消さなかったところに、日本歴史の面白い特長が見られるのであります。このことは天皇制の問題を理解する大切な鍵だともいえるのであります。

こうした公家と武家の争いを、図の上方でグラフにしておきました。

鎌倉時代のはじめ、幕府をおこした源氏の本家は頼朝、頼家、実朝の三代ではろびますが、その機会に公家は勢力回復をめざして、承久の変をおこしますが、見事失敗してしまします。承久の変という日本の内乱が、日本侵略を考えて



におかず、北条氏時代の戦をはじめると直ちに味方してまた武士たちを、全くの忠臣というか忠実な奴隷ぐらいにしか考えておりませんでした。

利害の一致から成功した鎌倉幕府の滅亡のすぐあとで、後醍醐天皇の親政が行なわれ、世にこれを建武の中興と呼んでいます。これは時代

に合わない公家の専制のためきわめて短い寿命しかありませんで、すぐ南北朝時代に入ります。武士の

社会は指導者の後任として足利氏を見つけて出すと、これを中心に新しい武家社会をせよと再建して、公家社会なんか、それこそ問題にしていなかったものであります。公方の社会は急速に無力化していくのであります。

頼朝は地図からまなこ動かさず

静や静頼朝の眼と政子の眼瘦せても馬 錆びても太刀にある力 ほととけば天井板も焼くつもり

の原因の一つである血液の酸毒症が無くならない、アルカリ性に変化するから全く打ってつけである。

こんな訳で私は入院をして科学的な食餌療法を続け毎日毎日おからの油いためや野菜の天ぷらばかり食って、体力が急に衰えてからでは遅い、今の内なら年こそ五十七才でも体重も十六貫五百匁もあり、体力に自信があるからやってみようと言う気になり、断食に踏み切りました。

それも肺病のように日々大量の滋養を摂らねばならぬ病氣とか密のような難病なれば危険なことは素人の私にもよく判ります。それが昭和三十四年の六月八日で川維浜寺支部が生々庵、好郎両氏の御尽力で復活したのが前月の二十四日。この六月八日は恰も本社六月初会の定例日でしたので、九日に入寮すると随分頑張ったのです

が、家族一同九日なんて日は縁起が悪いと承知せず、句会をその日に控え乍ら一同に負けて入寮しました。それが、

仏滅を避けて入院

する弱わさ

茲で順序として断食の大略を述べますと、先ず事務所で病状を詳細に聞き取られ、体重と共に記入、直ぐ囑託医が来て血圧体温脈博は勿論、既往症現況から全身の診断があつて断食に耐え得ると認められると、断食中の反応やその他詳細な注意があつて始めて適格者として入寮費を納める。

大抵の人は午前中に入寮の手続きをしますからその日は午後三時の夕食から始める訳ですが、その日は普通人の量即ち米一合分にそれに適した副食物、翌日の第二日は午前九時の朝食が米で八匁分六匁四匁二匁と段々減り、第六日はお粥を二杯、第七日は米粒が少々這入った薄粥、最後の日はお汁粉の椀に七分目位の米粒の一つもない純お粥、その夜御丁寧に下痢薬を飲まされる。(以下次号)



にきび
治療剤!



チューブ入 200円



階段

丸尾潮花選

階段へ肩を貸られる千鳥足 花乃子
 階段が煙突になるビル火事 弘道
 階段へ一歩遅れた母を待ち 鮎子
 二段ずつ飛んで上って乗り遅れ 初甫
 はね上る階段おろおろついて行き 恵甫
 階段を四ツ這いで子は上って来 千甫
 勉強を済ませましたという階段 豊年
 階段の裏で女将が幹事攻め 隆史
 階段を派手にこらんだボヤで済み 九呂平
 階段を磨いて女中叱られる 山椒坊
 階段を一つ登った子の笑顔 静水

一 路 集

階段をゆっくり上がる物思い ほか平
 気は勝っていても階段歳を知り ほか平
 階段は母がへそくりくれるとこ 淀月
 階段の隅に靴置く二階借り 光郎
 遙近く階段二段すつのほり 一鶴
 ロマンスをラセン階段知つて 雄々
 階段へ今帰ったと酔うて居ず 蜻蛉
 階段を蹴落す駅の荷にあきれ 伸太郎
 階段でやっぱり女うまく逃げ 鶴汀
 アパートの階段ズラリ子が座り 鶴汀
 階段の息に近ころ老を知り たけお
 階段へ今逢う息を整える 和三郎
 階段の音へ内証の隠し場処 和三郎
 屋上へ子は二段ずつ駆け上り 宗太郎
 二日酔い階段の一步さえ怖く 徹也
 二階借り爪先立てる癖がつき 平凡
 階段を遊び場にして団地の子 保夫
 階段を昼長のべらに二つ飛び 藤波
 階段で花嫁さんに手がかり 愛鳩
 空港の階段降りる晴れた顔 草々
 手をつなぐ子に階段ですね 雪峯
 珍客へ子等階段を派手に降り 季賛
 階段を遅刻一気に駆け上り 蛙水
 階段が恐くないほど酔うている 愛鳩
 階段に部品飾って靴磨き 拳児
 掃除分担階段だけがはつとかれ 忠三
 屋上へだけの階段歩かされ 雄水
 階段で釘付けにさる痴話がもれ 古心
 お二階へ派手にあがったいい匂い 八九寸

階段をのほり切ったらおとり言う 庸佑
 矢印の通り階段のほらされ 卯之助
 階段の下へ値切った客を寝せ 実男
 階段に文句がついてことわられ 美舟
 階段を奇数で上った発車 恵二朗
 階段を飛ばし追れた猫が下り 十九平
 階段でネクタイの締たしめる 可住
 佳
 階段になって酔どれ真顔なり 圭井堂
 階段へ義股は生き抜く音を立て 井蛙
 我慢もう出来ぬ階段かけ下りる 十九平
 デパートで動く階段見てもどり 幽谷
 階段をガウンの裾で拭いて降り ひろし
 人
 配膳が階段へ来て引き継がれ 代仕男
 地
 階段になれて旅館の女中老い 光道
 天
 初孫が来て階段が恐くなり 旭峯
 軸
 フイナーレースター階段降りるとこ 潮花

年 季

津田麦太楼選

くどきかた年季入つてわと思ひ どんたく
 奉公のつらき年季が待ち切れず 祥月
 年季まで勤めず嫁にゆくときめ 雪美
 無駄にめし食つては腕を見せ 庸佑
 礼奉公してまで年季無事にすみ 卯之助
 朝鮮年季あけ近き煩きすり 光道
 前垂れも年季がはいった位置でしめ 幽谷
 民主主義年季来るまで忘れとき 同
 六感が年季で当る老刑事 雄々
 よう音知ここまで年季入れたもの ほか平
 自讃する年季は知れたものであり 同
 丹波杜氏年季を入れた酒の味 同
 長年の年季が指の型を変え 静水
 心機一転年季の入った職を捨て 同
 府丁の閉き年季の味を見せ 蜻蛉
 子沢山口をへらしに年季奉公 一鶴
 年季は済んだに借金のかかり 同
 年季明けもうイヤリングのヒール 光郎
 婦長さんの年季が冷たく感じさせ 八郎
 中国とは見えぬ年季の舞姿 八九寸
 三十年の年季尻だけ重くなり 藤波
 見込まれて年季奉公から養子 同
 いとんとおれん年季の明けを待ち 井蛙
 府丁へ年季を見せる豆絞り 和三郎
 年季では食えぬ世となり街の風 鶴汀
 腕よりもおつむの方が年季入り 雄声
 仕立物年季の腕でよくはやり ひろし
 年季入れた職継がすむ弟子が来ず 生薑
 年季を入れ直すと吐月筆引きよせる 紡毛

今日からは年季が明けて独り立ち 旭峯
職人の年季骨ある飯を食い 古心
学歴を年季で使う 肩が凝り 実男
インデュー年季のことを先ず尋ね 十九平
年季あけ婿にうれしいが二ツ三ツ 恵二朗
年季をば惜しまれつも世が変り 圭水

佳

脇役の年季へ拍手おくられる 初甫
年季はど貫祿のないままに老け 九呂平
さしがねに年季を見せる宮大工 淀月
三年の年季が長い故郷の母 蜻蛉
庵丁一本年季を積んで旅を了え 井蛙

人

兄弟子の自慢年季の鮑屑 十九平

地

水引も年季も入れた諷い振り 圭井堂

天

年季奉公に出して寂しく母は縫い 光郎

軸

爪弾もさすが年季の糸の冴え

ハンドル

魚住満潮選

ハンドルは夫がとつて二人旅 弘村
ハンドルは右に左に人を縫い 花乃子
ちと慣れて片手離してみたり 鮎子
妻乗せてバイクハンドルしか取り 市郎

ハンドルはババにまかせて箱根越え 拳児
ハンドルを握り婦さぬ腹らしい 実男
ハンドルの無事を祈つて朝を出し 豊年
ハンドルをもて余してる砂利の道 卯之助
ハンドルの今日も無事故の手垢なく 光道
白魚の指ハンドルを軽く持ち 雪美
まだ妻が僕のハンドル敬遠し どんたく
ことさらに切るハンドルで嬉しい日 隆史
ババ押し子ハンドルへしがみつ 光福
ベテランの握るハンドル脈を打ち 繁太郎
釜ヶ崎ハンドル心して握り ひか平
ハンドルは好きな彼女の手もはらい 淀月
鼻唄で握るハンドル気にかかり 雄々
淀川を渡りハンドル持ち直し 可住
三輪車のハンドルウイキしがみつ 一編
女房のハンドルへまな浮気させ 光郎
国道へ出てハンドルもはつとする 蜻蛉
ハンドルを握る娘の薄化粧 秀峰
細腕にハンドルさばき派手にやり たけお
ハンドルを並べて春の唄が行く 和二郎
ハンドルが年季でこなす七曲り 井蛙
ハンドルの片手を休めた松並木 藤波
無事故表彰取つて此のた乗つてい 圭井堂
恋人を乗せたハンドルさばきなり 鶴汀
ハンドルを持つ夫なり日々祈り 敏明
ハンドルの温みへ非常線を張り 宗太郎
自家用車ハンドル握る美女逞し 八郎
ハンドルが其儘のこる事故現場 照児

ハンドルは背のピストルの云うまに、敬也
急カーブ大きく切つて直ぐもどし 平々
ハンドルの腕もたしか女将にて 八九寸
ハンドルを持ったボーイ撮つてくれ 涼髪
スピードを出してハンドルまた狂い 定月
ハンドルの上マスコット揺れている ひろし
免許通つてハンドルがまだ固い むじな
ハンドルを握り絶景目に入らず 愛鳩
バスガイドの唄ハンドルは聞き流し 代仕男
須磨明石澄んでハンドル心地良し 草々
ハンドルの向きそのまゝ事故現場 季費
ハンドルがままにならない試験場 雄水
ハンドルの疲れはだつて道に見え 古心
春光を切るハンドルに無表情 紡毛
ハンドルの切りそこないで済ませ 圭水
マスコットゆれてハンドルあわてさせ 恵二朗
ハンドルを切れば真すぐれが家路 ろ亭
ハンドルの自信九十軒を出し 十九平
ハンドルへ自信両手を遊ばせる 雪峰
生活につらなるハンドル握りしめ 庸佑
ハンドルは女新車へ振り向かせ 伸太郎
ハンドルのどちらも手を振る社の車 同
トラックすすれハンドル軽く持ち 初甫
ハンドルへ妻の手製のマスコット 同
ハンドルを握る手袋真白い 蛙水
ハンドルを握る逆手の癖を知り 同
ハンドルへ気をゆるめない客を乗せ 孝風
ハンドルは酔うてはいるが確かなり 同

ハンドルも持てぬ気弱な男なり 雄声
自転車のハンドルさよめ 船と云う 同
ハンドルを奈落へ切るとはあきれたね 生薑

佳

全速で行くハンドルの密輸めき 旭峰
妻や子の顔にハンドル自重する 弘道
ハンドルを持つ指にあるエンゲージ 美由起
軽快なリズムハンドルまでがのり 庸佑
人生のハンドルカーブ切りそこね 祥月

人

免許証下附ハンドル風を切り 浄水

地

ハンドル自慢その女と死んでいた 生薑

天

ハンドルは女性スピード出すでなし 保夫

品質優良
タチカワペン
TACHIKAWA PEN
大坂市東区常盤町一丁目十一番地
立川ペン先株式会社
タチカワペン
タチカワペン
タチカワペン



柳界展望

旬会

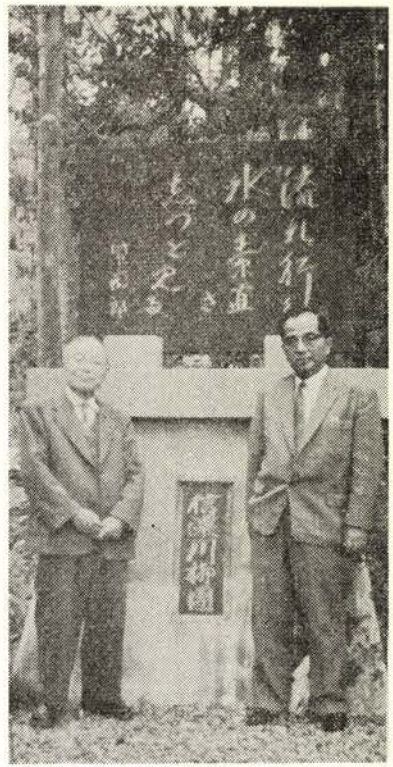
▼本社六旬会は八日(木)午後六時から、上六南の関西会館(天王寺電話局東隣)三階会場で開催。柳壇の一茶とうたわれた須崎豆秋氏が五月四日に亡くなられたので「豆秋をしのぶ会」とした。生前の氏を偲のび多数のご出席をお願いする。▼南区医師会文化部杏林川柳旬会は五月二十三日(火)午後七時半から南区三休橋南詰中島小児科診療院楼上で開催された。▼南海電鉄川柳旬会(大阪

市)は五月十八日(木)午後六時から難波親和クラブで開催。▼コクヨ川柳会(大阪市)旬会は五月二十五日(木)午後五時半から黒田国光堂で開催。▼川維浜寺支部(堺市)は四月二十八日復活二周年会を盛大に開催された。▼大阪通信病院五月旬会は二十七日(土)午後二時から五階会議室で開催。以上路郎主幹出席。▼川維奈良支部五月旬会は六日(土)奈良高校で開催。▼ひろしま川柳会第二例会は五月十五日(月)午後六時から広島駅三階会議室で開催。▼川維下関支部旬会は五月七日一の宮福王寺で開催。▼第三回オール郵政川柳誌上読詠大会は兼題テレビ・平和・美しい・金庫・祈り・誇り・旗・海・朝・世界・各題別紙に三句あて清記、所属局と氏名明記、五十円封入の上、六月二十日までに京都市左京局区内

京都地方簡易保険局紅川柳会宛。▼矢野赫堂追悼旬会は五月十三日松山市湊町六丁目中川たけし居で開催。▼第三回川柳たけし居で開。大会は五月十四日(日)正午から佐川町青源寺で開催。▼第七回愛媛川柳研究大会は五月二十一日(日)午前十時から鈍川温泉観光センターで開催。▼産経新潟川柳大会は五月十四日(日)午前十時から新潟駅前青年の家で開催。▼きやり吟社旬会(東京都)は六月二日午後六時から千代田区神田須田町二の二五柳森神社で開催、宿題「暴力」「酔っぱらい」「六月の生活」各題三句会費百円。▼京都柳壇川柳大会は五月十四日(日)午後一時から相国寺本坊で開催。▼故大塚健爾追悼誌上旬会は雑詠、海又は潮、各三句以内、半紙四分の一大の用紙に明記、六月十五日までに四十円封入の上、東

京都町田局区内上鶴岡四八八八川柳人編集所宛。

消息
▼中島生々庵、小石夫妻は五月四日長野善光寺の参詣、志賀高原の観光、湯田中では、中島紫苑郎氏と無心庵で連山を眺めながら歓談された。▼河相すゑ氏(西宮市)は五月九日東北大学への所用のため仙台へ出張、作並温泉に泊され、鶯の鳴く山の湯で日頃の疲れを癒された。「ひとり来て湯槽に昔しのぶ夜」▼大西八歩氏(鳥取市)は息災に暮して居られるが、鳥取柳界の模様を、日満、若人氏等の若手の肝煎りで着々前進しているだけではなく、短歌会、俳句会との横の交流もスムーズに行ないお互いに短詩文学を楽しんでいますと寄稿された。▼戸田古方氏(豊中市)の絵画作品「尾之道」が東光会展に入選展観



翁の句碑の前で 中島紫苑郎翁(左)と生々庵氏

奥信濃から 中島生々庵

五月三日早朝老妻を伴い長野着。亡母の十年忌に善光寺お朝時に詣り、車を飛ばして湯田中の中島紫苑郎氏を訪ねた。念願が叶い、診療所の庭にこんど建てられた句碑の前で記念撮影。氏の御案内で無心庵に到り折からの春雨にけむる連山を一望の裡に入られてビールを満をひく。無心庵は昨秋路郎先生御夫妻が数日間泊りになった紫苑郎氏の書庫である。その夜湯田中の宿に帰り一泊、四日朝志賀高原に登る。途中ドライブウェイの桜は満開。その間をくぐりぬける様に高原に達し昼食をホテルですまし、二時四十分湯田中発で帰阪の途に就く。

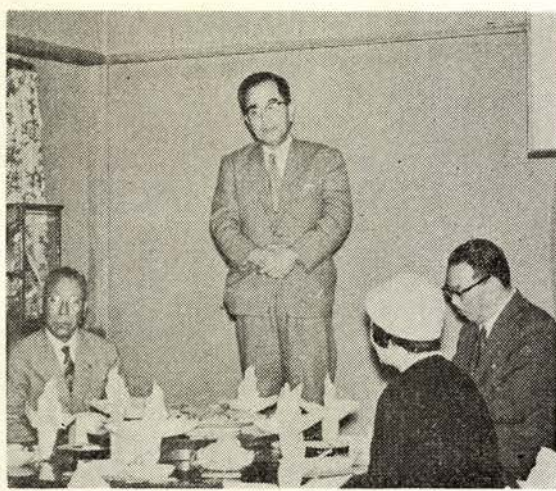
無心庵で日本一の雨に遭い 生々庵

される。なお同氏は今春、東光会員に推薦された由。▼丸尾湖北氏(大阪市)は五月一日社の旅行で北陸の片山津温泉に清遊された。三月にひいたままの風邪をもてあましての旅である。▼牟田一哲氏(大阪氏)は四月三十日学会出席のため夫人同伴で長崎へ、学会終了後雲仙、天草を巡遊五月三日帰阪された。「古稀も過ぎ学会だしに二人連れ」▼岩本具里院氏(大和高田市)は私は今後とも柳界共道の広場を求める……ただそのことだけに専心努力するつもりでおりますとの便りを寄せられた。▼戸田古方氏(豊中市)は東本願寺の七百年大遠忌に際し、宗教教育の功労者として四月二十三日表彰式参列のため京都へ出向かれた。▼食満南北翁の句碑(盛り場をむかしにもどすはしひとつ)が宗右衛門町と道頓堀をつなぐ太左衛門橋北詰に南北会で建てることとなった。今回は色街及松竹関係が主体。除幕式は六月下旬の予定。発起人代表者は菅嶋彦氏。大阪市南区道頓堀角座前南北会事務所。▼野村味平氏(加賀市)は路郎主幹から寄贈の結婚祝い色紙を掛けるのに既製のものでは気に入らず製材所へ出掛けて障材の中から面白い木目の扇子型の板を見つけ出し、自分の手で加工を施して佳味あふれた額に仕上げ新居

に掲げるつもりでいます。▼福田丁路氏（高槻市）は五月二日から五日まで伊豆半島、伊豆大島廻遊の旅に出られ、大島の対岸北川温泉で一泊された。「方言のアン

生々庵氏等の外遊歓送宴

中島生々庵（本社副主幹兼不朽洞会理事長）、河村瑞川（不朽洞会維持会員）、牟田一哲（不朽洞会維持会員）の三医博が今回外遊



写真説明 向つて左から一哲・生々庵・瑞川の三氏（多志志撮影）

なったので、五月十六日午後八時から大阪南の大成閣で三氏外遊歓送会を不朽洞会常任理事の人々によって催された。先

から大阪市南区中寺町九正法寺で営まれた。▼橋本緑雨氏（大阪市）の令兄故牙羊氏の四十余年に亘る教育者としての功労を記念する顕彰碑が、三周忌に因んで郷土の人

す。終りに気候風土の異なる国々への旅行のことですから、くれぐれも健康に留意せられ、日焼けした顔で帰日されんことを衷心から祈って居ります」云々。続いて牟田一哲氏、河村瑞川氏、中島生々庵氏の謝辞があった。一哲氏は二

回目の外遊であり、夫人同伴六月八日羽田を立ちアメリカを経て欧州へ、生々庵、瑞川両氏は式場隆

三郎医博を団長とする一行に加つて、六月九日羽田を立ち一路欧州

に向われることとなった由。一行には裸大将の画家、山下清氏も加

わるそうである。医学の研究視察以外に美術館博物館などもつづき

に見学されるそうであるから、予想外に面白お土産が聞かれるこ

とと今から楽しんでゐる。帰日予定は七月十日頃であると。大阪駅

を六月六日午後九時、「明星」で立たれることとなった。

三氏のために乾杯をした人々を路郎・豊乃・榮・春葉・文蝶・い

わを・多久志・好郎・梅里・没食子・古方・潮花・恒明・小石・阿

茶・薫風子の諸氏。

（橋高薫風子記）

達により建設されることとなった。除幕式は八月中旬。▼三嶋美笑氏（松江市）は腹膜炎のため松江市日赤病院内科北三階七号室に入院治療中。▼小西雄々氏（米子市）は四月二十五日、湯原一机氏（米子市）は四月三十日、松江市日赤病院入院中の三嶋美笑氏を見舞われたが、昔と変わぬ川柳への情熱に感激せられたと。▼関戸宗太郎氏（小松市）は三月二十日小泉病院で盲腸を手術、経過良好で一週間後に退院された由。▼岩垣二重丸氏（大和高田市）は五月二十日本社に路郎主幹を訪問、故日本村氏の告別式に出席された主幹に謝意を述べられた。

柳 誌

▼川柳しかご吟社（アメリカ）では創立十五周年記念号として「川柳しかご」を華々しく刊行された。主幹・本田露角氏。▼「川柳こまつ」誌は四月号を五十号特集号として四月一日発行。▼「川柳平安」誌は五月一日発行の五月号で五十号を迎えた。▼川柳派寺支部は六月「はまでら」復活一周年記念号を発行。▼川柳並木会（笠岡市）は六月「川柳なみ木」創立六周年記念大会特集を発刊。

慶 弔

▼西出一栄さん（大阪市）の長男洋一氏は大槻英子さんとの縁談整い、五月十四日午後二時から生玉御殿で華燭の典を挙げられた。お

慶び申し上げる。▼阿部佐保蘭氏（東京都）の長女尚子さんは元三越川柳会同人武たけし氏の長男弘司氏との良縁整い、元きやり吟社同人三越川柳会会長の尾山鬼耳氏夫妻の媒酌で五月十四日、日本閣で華燭の典を挙げられた。▼黒川紫香氏（豊中市）は京阪神急行電鉄課長会会長に五月一日就任された。およろこび申し上げます。同社の課長は百人以上あるとのこと。▼須崎豆秋氏（大阪市）は昨夏直腸癌手術後自宅療養をされていたが五月四日午前五時死去された。年六十九。戒名釈清光。葬儀は翌五日午後二時から自宅で営まれ不朽洞会会員多数が参列、冥福を祈った。謹悼。会葬者は路郎主幹、

茂乃女史、生々庵、緑雨、梅里、好郎、潮花、喜仙、三夫、春葉、梅志、文秋、堰子、榮、すむ、薫風、小石、阿茶、一栄、清子、宏子、摩太郎、文蝶、没食子、立児、史葉、愛論、多久志、いわを、恒明、十悟、薫風子の諸氏。▼矢野赫堂氏（松山市）は五月五日死去。年五十二。氏は旧号虹の齋、昭和十年四月頃から川柳をはじめテニス、釣、山嶺等なかなかの多趣味な川柳家であった。

新会員紹介

五月

平田実男（宇部市）

半休氏推薦

正

川柳雑誌社

奈良支部創立記念 講演会

とき 4月22日(土) 午後1時30分

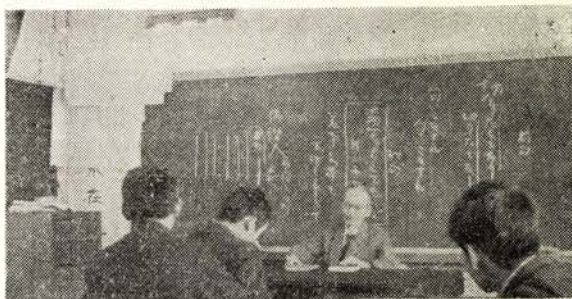
ところ 奈良高校書道教室

青葉の古都は朝からの小雨で、花とは別の風趣があつて、濡れた歩道も大阪には見られない土の色が美しい。

川柳奈良支部は全国でも珍らしい高校生ばかりのグループである。

この学生柳人の主柱は内海敬太君(不朽洞会員最年少者)である。敬太君の句をみて、これが十六才の少年の作品かと驚いた人もあつたが、それもその筈、敬太君の尊父は、かつての阪大川柳会で活躍した内海貞三氏である。

昭和10年8月に発行した阪大川柳句集麻生路郎選「大川端」には布施筑川、井上湧三、長崎柳秀、



写真説明・上は路郎主幹の講演 下は主幹を囲んでの記念撮影(香巳氏撮影)

笠原路生、尾崎方正、西尾青一路諸氏は有名な句がキラ星のように輝いている。

大望は春の雲だけ知ってくれ

路郎主幹はこの日、多忙の寸暇をさいて奈良高校へその記念講演会に出席された。

校内の壁新聞や券外に、

講師、関西短詩文学連盟理事長麻生路郎先生、歓迎の文字が目立つのも学生らしくはほえましかった。

三年生が修学旅行中だったが、二年生の制服諸君が、この大川柳人を迎えて若い頬を紅潮させていた。

先生の講演は、これら初歩の学生柳人に一時半、手をとるよう「川柳とは何か」を話された。神妙に聴き入る姿は純真そのもので、折柄晴れわたった青空のようすがすがしきであった。

校庭の後方に黒髪山が美しく絵のようである。先生は黒板に教師よろしくチョークを走らせ、先生ご自身も若やいでおられた。

次の兼題をきめるのも協議制で、あくまでも学生らしい。

「どういう題にしましょうか」と、敬太君が言うと、「カニン

グや「虎の巻」という題が出る。この学生諸君と一しよに出席している和田先生や森口先生が苦笑される場面もあつて、まことに明朗である。こんどはそれらの題

を挙手による多数決で高票順にきまっていくなとも学生句会らしく、キビキビした進行ぶりは見ていて気持ちがいい。

宮口笛生氏(不朽洞会員)が支部長で村上春己氏らがこのグループに参加してこの学生柳人諸君を育成しようというのである。平均年齢十六才という、日本一の若さを誇る奈良支部が、こんどどのように伸びていくか、これも楽しいことである。

校庭で記念撮影をすることになった。若草山が目の前だ。音楽教室からは、これはこれは守屋浩が歌う「有難や節」のメロディが流れてきた。

昭和36年4月22日は川柳奈良支部の誕生日である。ほくはこの日を永久に忘れることはないであろう。

(不二田一三夫)

★

兼題「母校」麻生路郎先生選先輩が酔ふ母校の唄になり 春己父さんも出た学校へP・T・A 同じいさんに寄附金取りに母校より 三知年取つて立された校庭見て廻り 同金次郎の礎だけがまだ残り 敬太一本も枯れず母校に咲く桜 笛生出席者一麻生路郎先生・一三夫・笛生・春己・宏子・晴子・嘉寿男・武男・圭三・博・源太・万々・仰天・誠剛・信行・清・天佑・彦・紀元・信義・昭夫・崇・芳隆・赤笛・宏敬・啓林・三知・敬三・敬太

ドイツ・マック社製

強力 ローヤル・ゼリー 製剤

ROYAL
JELLY

活力を高める

強精と長生への天然の強壯効果

日本新薬株式会社

アピ

正式名 アピフォルティール

課 題「茶 柱」

麻 生 葭 乃 選

疑えば茶柱までも寝てしまひ 若菜
内証の株茶柱におちよくられ 同
茶柱へすねて鏡もみぬひとり 同
コト党茶柱なんか気してず 阿茶
茶柱の茶碗隣りの人にゆき 同
茶柱のこけた方から借りに来る 同
茶柱が薄い番茶へ二本立ち きた子
王手飛車茶柱までも加勢する 同
病人の目に茶柱も斜になり 同
茶柱ものみ込んで行くいい知らせ 春栄
おごる気になった茶柱じつとみる 同
茶柱が立って賑う台所 徳子
茶柱が立てど治らぬ娘の病 同
隣席の茶柱うらやましくのぞき 栄
茶柱へ歎声ちよつと大きすぎ 同
失職の茶柱さえも頼みにし 奈良子
茶柱が景気を添える朝となり 同
茶柱に今日の倅せ信じ切り 清子
北浜の夢茶柱に腰を上げ 周甫
茶柱が立って茶碗の向う岸 知恵
内証事そつと茶柱袖に入れ 悦子
茶柱を倒さぬようにそつと飲み 白美
茶柱の立った受験日母強気 酔夢
茶柱もあてにはならぬ不意の事故 山子
嘘を云う茶柱今日も刺に立ち 好女
茶柱を箸で泳がす朝の膳 葭乃

次回題「バトカー」切六月末日

★ ある講演会で

紅原綺史朗

最近、川端康成氏の講演を聴く機会があつて、ちよつと感じたことを書いてみたい。

氏は人も知る日本ペンクラブの会長である。氏の才筆は広い読者層をもち、特に学生間に人気があつた。会場は若い人たちによつてギッシリ埋められていた。若さにあふれ、会場は大学の講堂をおもわすようであつた。

氏は、講演は苦手だと断つて、はじめから立ち往生よろしく、ボツリ、ボツリつきたての餅をちぎつて投げつけるように口を動かすのである。二分間しゃべれば一分間お休みという、超スローであるが、その一言半句には、高い文学の香りがあつた。聴衆は熱心そのもので、やや聴きとりにくいその一と言一と口に食いついていくかのようである。

プログラムは二人の講師で一時間半ほどの講演時間であつたが、氏は「講演は好きではない」と、ことわつていたのに、興が乗つてきたのか、とうとう一人で一時間半、独走してしまつた。それがた

め、後から出た講師は「あいさつ」しただけで五分間ほど演壇に立つただけである。

どうであらう。これが他の世界だつたら、後から出た講師は、そのままとなく引っこむだらうか。ほくは文学の世界にこんな美しいものがあることを今日まで知らなかつた。

後から出た講師とステージで握手して、聴衆の拍手に応えながら、「すまん、すまん」と謝りながら川端康成氏のはほえましい姿が非常に印象的だつた。

★ 川柳とアメリカ

ハツイ 白砂旋風

川柳がアメリカに於いて果たす役割りは、非常に重大である。アメリカの今日の

ナヤミは、精神病患者が年々非常に増加して来たことである。その原因は、人間が物質化と

機械化して、人間性を失いつつあるからです。

数年前、川柳雑誌社主催の座談会での話題にも上りましたように、不思議にも精神病患者が川柳人ではないようです。その理由は川柳の本質が、人情美 (The Beauty of Humenotion) であるために、川柳が人間の心を慰め、人間の心を養い、人間の心を美化することによって、善人即ち神と仏を創ることであり、それは丁度宗教の目的とも一致するものであると、僕は結論しました。

川柳がアメリカに於いて、精神文化を創る事になれば、僕も熱情をもって、川柳道に励みたいし、又、日本に於ける川柳人も川柳の世界性を深く認識して視野をグッと拡げて頂きたいものです。



★ ホップのきいた本場の味...

**サッポロ
ビール**

店番の手持ちぶさに紅をつけ 香林
動くから仏像じゃない骨董屋 一瓢
店番は老婆で足りる程さびれ どんたく
値切られて店番奥へ聞きにゆき 牧人
店番もまだ無理らしい咳を出し 堰子
店番へ鈴らん灯がもうともし 水客
店番のどうやらつんぼらしいなり 梅志

真鍋一瓢選

いずれ面張り返す氣と小金貯め
小金にぎれば寄りつかんだ人も来る
株買うてからの小金の減る速さ
小金たまつてそうそろ遊がものおぼえ
小金蓄め養老院へ行くつもり
小金を貯めていような顔で座を外す
なまじつか小金を貯めて売れ残り
担ぎ屋がまだ止められぬほど蓄まり
泣き言のいつか小金を貯めている
利子で食えるほどの金とは聞いている
親類がちよいちよい借りに来る小金
けちめと小金を貯めて瘦せており
看護婦の大意小金をためている
利回りが何うのころと小金貯め
小金ちと出来て冷たい人にする
未亡人小金に生きがいつなぎとめ
立て替えた小金そのままだ忘れられ
保守党へ小金が出来てから変わり
けちんぼで溜めたが医者に告ぐられ
小金出来たらば浮気の虫が起き
信託がどうのと少し溜めており
小金貯め二号そろそろ手を切る氣
小金持ち出してだんだんケチになり
小金でも貯めたと見たが愛想よし
オールドミスのため小金貯めている
なまじつか小金が出来て仲違い
小金では買えない土地とあらめる
表札も出さず小金を少し溜め
小金持つ男のがはずしのしわ

生薑
一鶴
栗
万
的
十
悟
紡
毛
生薑
梅志
晃
水客
梅志
香林
水客
小松園
弦月
生々庵
南宗
弦月
多久志
多入志
文秋
柳安子
牧人
柳宏子
紫香
一十
いさむ

香林 一瓢 どんたく 牧子 堰客 梅志 瓢選 一生 鶴 柴的 万悟 十毛 紡薔 生薔 梅志 晃客 水客 梅志 香林 水客 小松園 弦月 生々庵 南宗 弦月 多志 一三夫 多志 水京 文秋 柳宏子 牧人 柳宏子 一十 紫香 一いんち

小金持つて女は強いことを言う　一十
老ほけになつても小金ものを言い　香林
金出来て世間の無駄がよく目立ち　水洞
えらそうな顔が小金でうろろし　正一

西尾 栞選

人柄が變つたような居僅促
成上りでも人柄に親しまれ
人柄はすぐ本心を口に出し
しとやかなその人柄にひつかり
不用意に出た人柄を見逃がさず
人柄にふれた或る日の下足番
の言えばさすが船場と言ふ育ち
サロンパス貼つて人柄みせている
人柄がこんなに違つて隣り合い
人柄を見込まれ市場の夜警とは
満ち足りたくらし人柄田うなり
商売にその人柄が邪魔になり
質屋へ来ても恐縮さるるお人柄
口説くにはその人柄が邪魔になり
人柄がほのかに匂うたたすまい
ご養子ですか等とお人柄見すかれ
人柄に負けて忠告受け入れる
嘘と知りつつ人柄逆らわず
お通夜でもその人柄がかくせない
普席で又揉めているお人柄
お見合いへ父母の人柄プラスされ
金のことになって人柄見をこない
人柄を買つて顧問にまつりあげ
人柄がこんな長屋の奥に居る
人柄はまた会計を頼まれる
お人柄蝶ネクタイまできに見え
人柄がジャンジャン町を怒う抜け
人柄がたの鼠でない目付き
親に似ず人柄だけをほめられる
人柄ががらりと替るバーの酔い
ただ座るだけで空気がほのぼのし
こしとしいぶし銀のよお人柄

水京

静馬
狂二
いさむ
庸佑
阿茶
奈良子
柳宏子
水客
十悟
落児
小松園
弦月
万的
多久志
奈良子
生々庵
愛論
文蝶
水客
進之助
奈良子
静馬
端歩
敏明
いさむ
生々庵
文蝶
生々庵
計光
舟遊
晃

葉選 正一 香水 一十
靜馬 狂二 いさむ 庸佑 阿茶 奈良子 柳安子 水客 十悟 藍兒 小松園 弦月 万的 多久志 奈良子 生々庵 愛論 文蝶 水客 進之助 奈良子 靜馬 端歩 敏明 生々庵 文蝶 生々庵 計光 舟遊 晃京

土端場にきて人柄がばれてくる 柳安子
人柄はよいがジキルとハイドなり 瑞歩
頭からなめられそうなお人柄 南宗

清水白柳選

先輩は捨て身でゆけとけしむる
爪に灯を点し捨て身で買った株
相場師の意地は捨て身のい度胸
離婚する肚で亭主へ口答え
あたかい眼で見守っている捨て身
共白髪捨て身の恋を笑い合い
川遊び捨て身の腕に助けられ
新米の捨て身は軽くあしらわれ
セールの捨て身は長くさる来
あの時は捨て身でイチク奪いとり
不勉強捨て身の勇でごまかせず
捨て身でくる子供に相撲負けてやり
債権者捨て身の口説きに座をやらし
どたん場となりや不渡りも出ずつもり
捨て身だった妓は大分酔うている
捨て身なふつかウマリ笑うてくれ
嫌われてもよい捨て身の体あたり
東西が捨て身の宇宙旅行なり
述懐は捨て身でしたと嬉しそう
すねかゝる子へ捨て身の菜っぱ服
捨て身でも勝てぬ相手と組む不運
いざとなりや捨て身でやると意けり
インテリの弱き捨て身になり切れず
うにでもせよとは借りている強味
眼の光り捨て身とみえてたみかす
羽目板におでこぶつけた捨て身なり
じり貧へ起死回生の株を買う
前歴を忘れ捨て身の仕事ぶり
侮った相手の捨て身でも余し
給金を直す捨て身の業が効き
ダンゴも十七才も捨て身なり
子沢山捨て身の意気がまたにじり
中年の捨て身だんだん怖くなり

柴 圭井堂
一三夫 水客
水 洞
水 客
主 開堂
奈 良子
文 秋
紫 香
壱 子
鎮 海
静 馬
瑞 歩
一 瓢
万 的
水 客
南 宗
瑞 歩
柴 一三天
庸 佑
静 馬
阿 茶
進之助
柳 安子
瑞 歩
晃
静 馬
柳 安子
主 開堂
多 久志
水 洞
柴 否

柳選 榮 圭并堂 一三夫 水洞 水客 圭并堂 奈貝子 文秋 紫香 堰子 鎮海 靜馬 瑞步 一瓢 萬的 水客 南宗 瑞步 榮 一三夫 庸佑 靜馬 阿茶 進之助 柳宏子 瑞步 晃馬 柳宏子 圭并堂 多志 水洞 紫香

捨て身で行くと他人はくやしやなく
 身を捨てる覚悟ふすを閉め終り
 七三の予想捨て身でくつがえし
 憶れて証廻捨て身でかい出し
 捨て身になると自動車は捨てられ
 ビビッと入捨て身を利した西家園
 白柳

森下愛論選

湯上りの客で儲けている屋台
風呂帰りの屋台の湯気を顔に受け
屋台へくだを巻いてる待ち呆け
盛り場の朝を屋台のみじめなり
屋台店やる気でおよし蓄めはめ
千金の夢みた果の屋台店
いつからか屋台の友が右左
細々と生さんが為の屋台引く
駅前前の屋台で終電までねばり
気軽うに盆交すのも屋台
日本の味を屋台に見つけ出し
しみ込んだ屋台の汚れ世を語り
日雇の憂さも屋台の中で晴れ
一杯の屋台の酒に明日を期し
庖丁に自信はおます屋台店
屋台店常連いるかとのぞいてみ
屋台店昔馴染が来てねばり
張り込みは隣の屋台で飲んでいる
いきつめの屋台を女房にしらしとき
青春を惜しむ屋台がはのがらい
業棲になつて屋台は雨に濡れ
屋台裏なじみの犬が来て座り
失礼でない鉢巻も屋台店
乗あぐれいっもの屋台でまた出合い
腰かけも積んで屋台も朝になり
こんな屋台案外うまいもの食わし

白柳 静馬 文蝶 水洞 南宗
進之助 柳海 鎮海 柳宏子 小松園 高史 一瓢 水客 舟遊 文蝶 水洞 南宗
多志 進之助 柳海 鎮海 柳宏子 小松園 高史 一瓢 水客 舟遊 文蝶 水洞 南宗
久志 進之助 柳海 鎮海 柳宏子 小松園 高史 一瓢 水客 舟遊 文蝶 水洞 南宗
多志 進之助 柳海 鎮海 柳宏子 小松園 高史 一瓢 水客 舟遊 文蝶 水洞 南宗

(庸佑清記)

瀧川にしなり支部句会(大阪市)
後藤梅志選

後藤梅志選

にしなり支部句会（大阪市）

単位三つたらぬま式に 出る
卒業の今日はドライに笑ふ行く
ハンサムなこれが僕だと古写真
押し入れの暗室写真マニヤなり
失意の日古い写真に火にくべる
すぐな恋だまて胸に抱きしめる
恋に破れて女が見せる強さ也
攪乱者しらん顔してそこに居る
議事堂を攪乱させる週刊誌
十代をカクランさせる週刊誌
別嬪にかき乱された社の空
雪降る夜の流れるのがわかり
流れ者流れる雲をみ上げて
お彼岸の経木を流す長びしゃく
流れ者街路樹の下で仁義切る
世の流れは仁術とも言うわす
夢米したそう戻っているそう
ヤンキーの方が日本の佳きを知り
ちる桜こアメリカの土の上
日光の火事アメリカを驚ろかせ

梅志 葉平 晃 柳志 唯義 生 夢 満 六 草 旅 連 速 太 舟 白 大 敬
太郎 遊 柳 芽 太
夢 虹 潮 竜 風 連 速 太 舟 白 大 敬
太郎 遊 柳 芽 太

川維 玉造支部句会 (大阪市)

西出一栄報

独り者やないかと休み狩り出され
夏休み母の仕事が一つ 殖え
フイアンセ決って大人らしうなり
フイアンセ幼馴染の気が抜けず
一二杯下戸にもつらいおつきあい
一二杯ですますつもりが終電車
反省の過去は消したい事ばかり
ふくれ面して反省をしてまんが
勝負師の血が反省をさまたげて
反省の色がやつれた頬に出る
反省をしたかその日はもの言わず

川維 阿倍野支部句会 (大阪市)

金井文秋報

人垣に小男一人浮いて居る十悟



門跡の姿へ附れる人の垣
折あけて小使一人花の留守
奥さんの気転奥さんお留守です
留守に來たらしく真紅のバラ匂う
新聞がはさんだまな静かなり
喜仙
大物の放言ポイントを外し
予備校はポイントだけを叩き込み
縁側の隅でがらくた巾をとり
がらくたをまじけたようスラム街
賃本の折目をそこからエロになり
梅志 晃 柳 生 文 秋
柳 董 秋

川維 淀川支部句会 (大阪市)

木村水洞選

若返りたいのに孫がまぶれつき
若返り薬の見本とりよせる
美容術首から上だけ 若返り
若返りの効果も見えず三面鏡
若返りのクリームもつと高価にて
つるつるとうどんすまて子は無心
沿道の花を散らしたダンブカー
ダンブカーと聞いて保険屋腰を上げ
ハンデルを地獄へ切ったダンブカー
新米のハンデル保険感じさせ
平等の権利で新米口を利き
一日の長新米に用事させ
新米がトップモードでやって来る

川維 ハワイ支部句会 (ハワイ)

築山快夢起報

月給で暮らしようとして新世帯
義理のため出米ないサラリーマン
安月給地処理する妻の腕の冴え
月給の高には触れず共稼ぎ
須磨子 玉屋 萩路 平八郎
萩路 平八郎 須磨子

川維 京都支部句会 (京都市)

田中鳥雀報

へれけの世話まで 飲代を払わされ
飲代を稼ぐ才覚憎くらしい
指切りでよし幼き夢とれんけ咲く
相入れぬ心義父と名はあれど
今契るサラサラ竹のなる音や
苗代田田螺一筋何処へ行く
田螺の不安は泥がかわいて行く
裏通り荒き言葉とすれ違ひ
裏通りから裏通りのバー御出勤
メモにある怒りまるめて捨てたけ

川維 広島支部句会 (広島県)

平田越舟報

上下に住んで田に名も知らず
団地の子その種々にボスがおり
見おさめの顔へ合掌ただ涙
顔役の一人に発言押えられ
九分通り出来一服の味の良さ
押売りにもらい泣きして母は買

川維 備前支部句会 (岡山県)

横山一声報

もらい泣き文化粧を忘れない
終電の車掌も破れた顔で揺れ
出勤時団地の階段あわただし
ザ・エンドもらい泣きた顔も
政治屋は団地へ別な敬を 読み 越舟
本心と別な笑顔でマダム 酌ぎ
本心を悟ってはいおくり物
本心と別の私が嫌になり
本心が聞きたい刑事茶をすすめ
失恋のショック散髪屋へ行かず
ブローチを言われた日のショック
置薬効めの自慢を言うて去に
効きめない孫への意見引こめる
高貴参飲めば効めがある予感
頓狂な声が空気を震えちまい
絵葉書で春の空気を届けられ
汽車の旅空気を抱いて寝る
温泉がきいたと黄色なタオル
ラブレター拾って尼さん苦が笑
一〇番もうサイレンの返事が来
一台の酒へ本心みなしやべり
本心が言えず交際つづいとり

川維 木次支部句会 (鳥根県)

藤井明朗報

落花ふと来て盆の風情もち
尋ねればこも留守なり春の宵
立看板車窓の視野を疲れさせ
名優の会報もやつぱりイキヤツ
出窓の車窓先輩気合かけ
車窓から信し合う手を握りしめ
俗塵と別れ車窓の紙コップ多
酔うた客乗って窓側替らされ
瞳と瞳とが逢うて車窓へ眼を
凡光

転勤の車窓に小さく母の影
上役がいて益はまだ酔えず
春の宵にさばけたパトロール
花もあり晩酌もあり春の宵
折鶴の影ふんわりと春の宵
車窓から湯気が舞い込む雲をば
貧乏のレジャーは鎌を研ぐばかり
投げキッス残して車窓遠く去り
車窓から見る日本にもこの広さ
車窓今故郷の山河遠くする
車窓よりばく父母へ目をつむり
着けば降るなど不安顔して車窓
しばらくは住宅の裏見る車窓
ほんとうに泣く人車窓に遠く居り

蜂人

川 米子支部句会 (米子市)

小西雄々報

ちっぽけな欲会長の座がもめる
食欲へ安心をして母はいに
美しくなりたい欲で断食し
レポートが真実五分で嘘も五分
一日の報告終えて子は眠むり
割勘だから気安くしゃべられる
偽せ出張見て来たように報告し
割勘を先輩奮発して払い
割勘に下戸仕方なく引っぱられ
割勘もバーではきかぬチップ代
報告もかね大臣は答弁し

蛙眠子
鶴丸
一机
まさよ
ユリ子
君枝
芋人
奎
天邪鬼
忠之
雄々

大阪通信病院川柳会 (大阪市)

橋本幸男報

心とは別に迷惑そうにモテ
月末や云うのに寄附の話が来
感嘆してサービスの手を握り
サービスのかじり汚職の種なり
アルサロでサービス券だの去に
サービスに聖徳太子おどり出し

俊作
愛論
史葉
康彦
正寛

川 南海電鉄川柳会 (大阪市)

辻圭水報

優待券座席を譲る顔でなし
優待券あるから誘うた春の宵
優待券持つて泣く子を二人連れ
優待券やった後から暇が出来
優待券の客の批評はきびしすぎ
旗日には優待券は袖にされ
優待券やって多忙をきりぬける
貧乏もまだ底辺でなしモク拾い
優待券机の中で期限され
社長より古い優待券の顔

圭水
貴山
句念坊
みなづき
武助
句念坊
武助
宏子
宏子
圭水
路郎

杏林川柳会 (大阪市)

小石

図星ともいわずにやにやして
折角の土産はしこの邪魔になり
耳打ちは邪魔してくれとなされる
邪魔なのは百も承知で姉芸者
邪魔者云々正義派の邪魔に潰れ
何となく図星とされたように聴け
証品つぎつけられて恐れ入り
教養が邪魔になつてと素直なり

小石
路文
阿茶
生々庵
野送路
瑞枝郎
瑞川
一哲
一伸

帝化川柳会 (大阪市)

谷沢好佑報

妻もどり子への口止めすぐに
この話こだけだと又話し
金一封口止め料と書いてい
口止めが廻り廻って帰って
本人はもう知っている猶と死期
年寄りへ畳の間も入れて建て
大広間畳の敷を読んでみる
新調の畳たしかな路みこたえ
一誕生畳のへりにけつまずき

柳影
風柳
一徹
京一樓
雅堂
一平
九紫
晴暉
好佑

コクヨ川柳会 (大阪市)

弱虫はガールフレンドに慣れ
弱虫に見られる程の低姿勢
外泊を得意気に云うドライな子
マネキャンを突き刺す目と並

理休
留鈍
柳波
龜心

333川柳会 (堺市)

林元歩報

娘もう年頃親も愛想よし
年頃ははくろの位置も気にか
年頃の予備校にいるふしあわ
年頃になれば右翼の左翼のと
平凡を読んで年頃夢を追
年頃は休めばデートかと聞かれ
年頃かフフと娘あぐらかき
気がついた時には年頃虫が
何がおかしいのか年頃よく笑

好郎
主水
雄声
一策
狂二
冗歩
新石
南宗
雪山

富柳会句会 (富田林市)

阿部柳太報

同窓の二人目出度くゴールデン
奥さんと同窓でしたと気持
妻の座に直る心算か味を見せ
情味ある話養老院の恋

謙造
同一
八郎
吉太郎

照れもせず年増女ののろけよう
あるだけのクダを巻いてる大年増
そんな事忘れてますと年増後家
よろめいて年増帽子ハイヒル
年増から恋の手管を教えられ
三男も承知で年増惚れてる
コンパクトはたく年増のしわだけ

静林庵
美代
紅月
吉太郎
とも子
尚史
摩太郎
とみえ

たけるべ川柳 (岡山県)

野々口美舟報

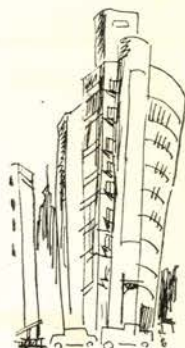
アベックへ巡視気兼ねの廻り道
厄介な話鼻毛を抜き並べ
転落の瀬戸際だったパトロール
閉会の挨拶役員だけで聞き
役員に仕立てて利用するだけし
うるさ型だから役員もって行き
パトロールとも知らずに犬が吠え
役員が輪番制でうまきいき
役員が最後の火鉢消して行き
預かった荷をもてあます満員車
役員の顔を立てます拍手です

秀波
美沙
素古平
ちとせ
房子
一喜
喜水
賤女
山彦子
喜楽
青柳
美舟

千日鉦大劇裏
TEL(07)271-0
アベノ橋近鉄地下
TEL(07)0147

大萬

★大万川柳(第百二十四回)を募る
兼題「郊外」路郎先生選
締切・六月十五日 (五時以内)
発表・六月廿一日 (五時以内)
投句先 阿倍野区松崎町三ノ二
大万川柳会宛



柳樽室

路郎生

★毎号内容が充実しているという讃辞をいただくので編集局はいよいよ張り切り、一同懸命の努力を続けている。

一層のご愛読とごべんたつをお願いする。

★小生も斎藤実盛ではないが老騷にむち打ち、先陣をうけたまわっているの、晒三味、迷亭、鞍馬、孝三郎の老友達が路郎をヘタラスナとスクラムを組んでの支援に感泣している。鞍馬氏の如きは毎号古句研究を発表して巻むことを知らないありさま、よくよく味読して氏の労苦に酬いて欲しい。

★近來統々柳壇の支柱とも云うべき柳人が物故する。今月は我が柳人文化財の豆秋君が永眠した。淋しいことである。お互いに健康に留意して百年の寿を保っていたいただきたい。

★下段社告の通り、誌代を値上げした。ずいぶんガン張り通したが、諸物価こうとうの大勢には抗することが出来なかった。ご諒承

の上ご協力をお願いする。

▼ペンの散歩▲

▼36年度の半分、つまり六冊目というところであるが、まったくアツというまだ。過ぎ去つてみれば、ガガリンの地球一周89分間も六カ月間もけつきよくは同じことだとおもう。だからこそ、これから迎える時間にも夢がもてるのかも知れない。

▼豆秋さんが亡くなられた。新派

八月号へあなた

の暑中見舞広告を

★一口金二百円。幾口でも申し込んでください。

★一口分の原稿は住所と姓と雅号程度。活字指定はおまかせ願います。

★一口分は五分の一段組三行。

★原稿締切は七月七日

日

★広告料は前金のごと(郵券代用でもよろしい)

★川柳雑誌社

の喜多村緑郎氏も逝った。柳壇と

劇壇にぽかっとながらあったよう

だ。しかしその句風と芸風はとも

にさんぜんと輝いている。この人

たちは時間をムダにしなかったの

だ。

▼先生にはウンと馬力をかけてい

ただいた。お疲れになったことと

恐縮しているが、良いものを早く

——これが活字の世界の宿命なのである。編集局一同ガンバリま

す。

居。

☆南海電鉄句会・15日(木)

六時半、題、見送り・根性・立

場、所、難波高架下親和クラブ。

☆京都句会・16日(金)夕、題、

蝦・栗気・グループ、所、四条繩

手仲願寺。☆にしなり句会・18日

(日)六時、題、迷い・師恩・青

葉、所、玉出新町通一ノ一後藤

梅志居。☆阿倍野句会・21日(水)

六時半、題、作戦・事務所・ま

中、所、旭町二丁目金塚会館。

☆333句会・27日(火)六時、

題、蚊・停留所・世間、所、堺市

老松町島野工業K.K。☆明和研究

句会・12日(日)一時、題、眉・

散歩・宇宙人・所、阪神鳴尾駅東

二百米鳴尾公民館。

☆六月句会・川柳雑誌社

☆宇部句会・4日(日)一時半、

題、盲・リーダー・輸出・後釜、

所、宇部市東区恩田長沢市住、津

秋六花居。☆玉造句会・11日(土)

七時、題、いい齡・中だるみ・指図、

所、市電玉造電停南百米、大阪信

用金庫。☆淀川支部・12日(月)

六時、題、足あと・親馬鹿・割

引、所、十三西之町五丁目東淀川

郵便局。☆かがみ句会・2日(金)

七時、題、関係・すばらしい・触

れる・家・作品、所、池田古心

居。

☆南海電鉄句会・15日(木)

六時半、題、見送り・根性・立

場、所、難波高架下親和クラブ。

☆京都句会・16日(金)夕、題、

蝦・栗気・グループ、所、四条繩

手仲願寺。☆にしなり句会・18日

社告

誌代値上げに就いてのお願い

ご承知のように諸物価が上り、紙代、印刷費、製版代、郵送費其他等も例外なく値上げになりましたので本誌もやむなく六月号から左記の通り値上げすることになりました。何卒御諒承願います。

本誌 一部 九〇円 送費六円

半力年 五七六円(送費共)

一力年 一〇八〇円(送費共)

ご注文はすべて前金に願います。ご送金は振替が安全です。

★今までの前金お払い込みの誌代は前金切になるまで従来通りお送りいたします。

★六月から普通郵便に現金同封は出来ないことになりましたからご注意下さい。

不朽洞

☆常任理事会

五月十六日(火)

午後七時から南区

三休橋南詰中島小

児科診療院楼上で開催、

一、川柳まつりの件

一、須崎豆秋追悼句会の件

一、誌代、不朽洞会費値上げの件

一、その他

を協議午後八時散会、一同引き続

いて大成閣に於ける生々庵・瑞

川・一哲三医博渡秋飲送宴に臨ん

だ。出席者は路郎師・霞乃女史・

生々庵・榮・春葉・文蝶・いわ

を・多久志・好郎・梅里・没食

子・古方・潮花・恒明・蕨風子の

諸氏。新会員紹介39頁へ(多)



脳卒中
動脈硬化
狭心症
脂肪肝に

ソーヤレシチン

健保適用



血管の
若さを保つ



あなたの句帳が
出来ました

★路郎好みに、すばらしく気が
まいています。句会でお使いになる
なり、抜けた句の整理にお使いにな
れば、何冊かで、あなたの句集の礎
稿が出来ます。又柳友への贈答に、
句会の賞品にも最適です。是非ご利用下さい。

一冊五五円・費送八円・十冊五〇〇円

大塚市生吉区万代西五〇二五

川柳雑誌社

電話 大阪 六〇八一
大阪 六〇五〇
大阪 七五〇五〇

食品と科学

食品と原資材・機械・包装の総合誌

6月号発売中

130円 (〒12円)

特集

ゲル曹の海外における使用状況
即席茶の現状と問題点
防腐剤の性状と作用

講座

食品衛生行政の歴史 ①
食品官能検査 ③
界面活性剤の利用 ⑤

◇海外ニュース ◇特許ニュース
◇意匠ニュース ◇商標ニュース

展望台：主食・罐詰・菓子・飲料・添加物

食品と科学社 大阪 6702番

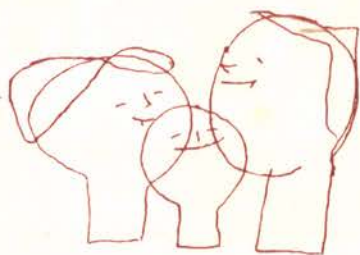
printed in Japan

（禁転載）
B例5号 毎月一回一日発行
川柳雑誌 第三十六年
定価 九〇円
（送料六円）
半年 五七六円
一年 一〇八八円
昭和三十六年五月廿五日印刷
昭和三十六年六月一日発行
大塚市生吉区万代西五〇二五番地
行即人 麻生幸二郎
〒大阪 生吉区万代西五〇二五番地
発行所 **川柳雑誌社**
電話 大阪 六〇八一
大阪 六〇五〇
大阪 七五〇五〇

▼▼▼
投稿規定
投稿は各種必ず別紙に記入、住所氏
名雅号を明記する事。
「近作柳稿」は一般作家の雑吟を募
る。
「川柳塔」は誰でも投稿出来る。
「川柳塔」の投稿は不朽洞員に限
る。

募 集
課題吟募集
戸田古方選
杉谷湖山選
木村水洞選
（六月十五日締め切）
大鶴喜由選
八木隆天郎選
直原七面山選
（七月十五日締め切）
近作柳稿 麻生路郎選
北川春葉選
川柳塔 麻生路郎選
（評論・研究・感想其他）
文 章 麻生路郎選
（毎月十五日締め切）

一家そろつてホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL 64551-2

疲れをとり
抵抗力の強い
からだをつくる

高単位綜合ビタミン・ミネラル剤

ポポン-S

20日分 350円・60日分 950円・120日分 1600円



塩野義製薬株式会社

麻生路郎著

好評噴々

新川柳鑑賞

川柳の味い方・五百数十句

（毎日新聞評）

麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手にかけているというから川柳歴はもう五十五年にもなる。この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心にその他の柳詩や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁寧な注釈を加えて、鑑賞の手引に資をうとした

ものである。

句の方より実はその鑑賞文の方がなかなかうがっていて、一気に読ませる魅力がある。

発行所

川柳雑誌社

電話 大坂 64551-2
〒540 大阪市東区西五丁目一五番地

麻生路郎先生著

川柳とは何か

送価 二五〇円
三二四円

「川柳の作り方と味い方」

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・鳴咽——そうしたものが十七音に圧搾された諷刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的であるその川柳がいかんして発生し、経過し、今日に至り、将来に動かしかもその作り方は、味い方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

取次所 川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区弘方町27 振替東京29507

価二五〇円

送費三二円

B6版

二五〇余頁